



第二号
平成 28 年 10 月 30 日
大アジア研究会
〒2790002 千葉県浦安市
当代島 1-3-29 アイエムビル 5F (☎047-352-1007)

代表
折本龍則
副代表
小野耕資
顧問
坪内隆彦

トランプ大統領就任の意味と 興亜の使命

「トランプ大統領」就任の意味

二〇一六年十一月八日は、百年後の世界史においても重要な日として記されることだろう。アメリカ大統領選の共和党候補であるドナルド・トランプ氏が、第四十五代アメリカ合衆国大統領に当選した日である。トランプ氏の大統領就任の意味は、むしろマスコミが垂れ流すような、暴言癖のある政治経験のない大富豪がポピュリズムによりアメリカ大統領に上り詰めたといった話ではない。グローバリズムによる貧富の格差、社会の荒廃、アイデンティティの希薄化がいに臨界点に達したと見るべきであろう。トランプ大統領就任はこれからの国際秩序が激変期を迎えたことを予感させるものであった。同じく本年、フィリピンでドゥテルテ政権が誕生した。ドゥテルテは麻薬や犯罪に対する厳しい対応と放言で話題になり「フィリピンのトランプ」と呼ばれたが、麻薬や犯罪の温床である貧富

の格差や貧困への不満、汚職の横行への憤りがドゥテルテの「世直し」への大きな期待となつて表れた。その面では、確かにトランプとドゥテルテは似たような背景を背負つて登場した政治指導者といふことができる。

トランプ大統領は保護貿易的な政策を打ち出しているが、伝統的に門戸開放政策を取るアメリカにおいてこのような大統領が出たことは世界に衝撃を与えた。もちろんトランプ氏が大統領として既存の勢力とどの程度対決し、どの程度融和するかは未知数ではあるが、「TPPからの離脱」「関税の引き上げ」「不法移民の排除」「減税(ただし富裕層は増税)」といった公約を掲げる大統領が誕生したことを示すものである。ましてや、トランプの登場により「自主防衛」「TPP反対」「核武装」といったわれわれが以前から唱えていた政策の実現は、一挙に現実味を帯びてきた。

外国発の自立の危険性

トランプが掲げる政策の一つに「在日米軍の駐留経費を日本が大幅増額せねば撤退す

る」といったものがある。これは、日本の対米自立を促すというよりは「日本がアメリカから一方的に見放される」状況に陥るものではない。むしろアメリカが国際的な安全保障の責任を負う「世界の警察」の役目から降りたがっているというアメリカ社会の「本音」を示すものでしかない。

対米自立は必然的に自主防衛を伴う。従つて自ら国を守る覚悟が政治家にも国民にも求められる。トランプの意向だからという理由でなされる対米自立には、この覚悟が欠けている。そのような態度で国が維持できるはずがない。そもそも「アメリカの意向だから」と言う理由で「対米自立」をするのは本当に「自立」なのだろうか。むしろアメリカに翻弄されて自ら政治・外交方針を決められない、「自立」とは程遠い政治ではないだろうか。わが国に求められていることは、即刻自主防衛体制を樹立することである。もはや自主防衛体制の確立なしに今後激変期を迎える国際政治は乗り切れないと自覚すべきである。

興亜論が提示する使命

創刊号でも述べた、今後の国際社会を考えると二つの視点を再掲する。

一つは冷戦以来続いてきた「価値観外交」はもはや通用しないということである。今後の国際社会は好むと好まざるとにかかわらず、利害関係や謀略の中で各国が強かに自らの国益を得ようと競いあうものとなる。わが

国の政界はそうした時代への適応が未だ不十分だ。

二つ目は、グローバル資本がもたらした貧富の格差、貧困の拡大は政治をも動かす大きな論点となったということである。それは「ヒト・モノ・カネ」が自由に動き回り、文化や歴史に根付いた秩序を破壊したことによるアイデンティティの危機も同時に孕んでいる。人々の不安や憤りが、ポピュリズムの蔓延にもつながっているのである。

先ほど、今後の国際社会は国益と謀略に翻弄される時代になると書いたが、それは謀略渦巻く世界観に甘んじるということではない。国益と謀略の時代もまた、パワーポリティクスに基づく西洋発の世界観に他ならないからだ。短期的にそういう時代の到来への備えを怠つてはならないが、同時に長期的に西洋発の近代的価値観を克服する遠大な理想を抱かねばならない。

かつて我が国の先人たちは、単なる国家の生存を超えた理想を胸に抱き、その実現に邁進してきた。その代表的存在である興亜論は、国家や民族の自生的秩序を重んじ、各その処を得る共存共栄の秩序を「八紘為宇」の理想に求めた。謀略渦巻く国際関係の中で、「自由、民主主義、人権」に代わる旗印を掲げることが、われわれに課せられた崇高な使命であると信じる。

本号目次

- 二面 樽井藤吉―
「和」の精神により『大東合邦論』を唱えた（坪内隆彦）
- 六面 アジア主義に生きた杉山家
の伝承②（杉山満丸）
- 十面 「東洋経緯」の魁、平岡浩太郎（浦辺登）
- 十二面 柳宗悦のアジア的価値観（小野耕資）
- 十四面 大アジア主義と
崎門学の関係（折本龍則）
- 十六面 「筑紫都督府」と
大宰府の成立（山本直人）
- 十八面 西洋近代思想への抵抗（坪内隆彦）
- 十九面 時論 外国人労働者問題
から見る目指すべき大道の覚醒（小野耕資）
- 二十二面 史料・『東洋学館趣旨書』
連載・大アジア医学の
なかの日本②（坪内隆彦）
- 二十四面 アルテミオ・リカルテ
生誕百五十年記念祭開催報告

樽井藤吉―「和」の精神により

『大東合邦論』を唱えた

（顧問）坪内隆彦

天誅組と森田節齋門下の影響

樽井藤吉は、日本で初めて「社会党」を冠した政党を設立した人物であると同時に、日韓合邦ひいては東亜全体の連合を提唱した人物として知られる。しかし、彼の思想を支えていたものは、外来の社会主義や安易な対外協調論ではなく、日本の伝統思想であった。樽井は、「大和」「親和」など「和」をキーワードとした日本の伝統的価値を普遍的なものとして称揚した。彼もまた、近代西洋文明を超えようとする独自の視点を持っていたのである。



樽井藤吉

嘉永三（一八五〇）年四月十四日、樽井は大和国宇智郡靈安寺村（現在の奈良県五條市）の材木商の家に生まれた。奇人だったという評価もあるが、若い頃から天才的側面があっ

たとの見方もある。例えば『東洋社会党考』を著した在野の近代史家、田中惣五郎も、樽井の獨創性を強調する。また、独自の国家社会主義を模索した山路愛山は、樽井について

「一種の天才を有したり。氏が数学を学ぶや、師に就いて独り見一（二けた以上の割り算）筆者）を卒へたるのみにて其他は自得して復た師の手を煩はざざりしが如き」と書いている（山路愛山「現時の社会問題及び社会主義者」『独立評論』明治四十一年五月三日『明治文化全集 六卷』三三七―三三四頁）。

文久三（一八六三）年、十三歳の夏、樽井の郷里大和を震撼させる事件が起きる。天誅組の変（大和の変）である。八月十三日、大和行幸の詔発令を受けて、尊王攘夷派の公家・中山忠光を首謀、吉村寅太郎、藤本鉄石、松本奎堂を総裁として、天誅組が誕生した。同

月十七日、天誅組は南朝ゆかりの観心寺で後村上天皇稜、楠木正成の首塚を参拝した後、五條へと向かった。午後四時過ぎ、五條代官所を襲撃、代官鈴木源内を殺害し、代官所を焼き払った後、桜井寺に本陣を構え、ここに代官所管轄下の天領を朝廷に差し出すことを宣言した。しかし、京都では薩摩藩・会津藩を筆頭とする公武合体派が巻き返しを図っていた。両藩は、反長州派の公家であった中川宮を担ぎ、孝明天皇に長州派公卿の追放を提言した。孤立した天誅組は高取城攻撃にも失敗し、朝命・幕命による諸藩の追討を受けて壊滅した。天誅組の変は、悲惨な結末を迎え

たが、明治維新の魁となったことは間違いなく、その後もその精神は、勤皇志士たちに受け継がれていく。

この天誅組組織化に尽力したのが、五條出身の森田節齋である。森田は、文化八（一八一）年十一月、医師森田文庵の三男として生まれ、青年期に京都で頼山陽に学んでいる。樽井はこの森田の思想から強い影響を受けたのである。樽井に歌道、漢籍等の手ほどきをしたのが、豪農の北厚治、神官の藤井頼重、僧侶の天野快道ら、森田の門弟たちであった。特に北との関係は強かったと指摘されている。後に、樽井は衆議院議員選挙に出馬する際、納税資格を得るために一時的に、北家の分家である森本家に入籍している（高木知明「在京時代の樽井藤吉の軌跡」『日本歴史』平成十一年九月、七十一頁）。

また、森田やその門弟たちは、梅田雲浜との交流を深めていた。山崎闇齋を開祖とする崎門学派三傑の一人浅見綱斎の思想を継承した梅田は、代表的な勤皇志士として活躍していた。弘化元（一八四四）年には、森田が雲浜の家を訪ね、肝胆相照らす仲になっていた（梅田薫『梅田雲浜と維新秘史』東京正生学院、昭和五十四年、六一―六二頁）。三総裁の一人藤本鉄石も雲浜の同志であった。十津川郷土は、森田が門下の乾十郎とともに訓練したとされているが、雲浜が果たした役割も極めて大きい。

皇国学振興を目指した井上頼園に入門

天誅組の変からちようど十年後の明治六年五月、樽井は上京する。同郷の先輩、保中富之助が西郷隆盛の書生に推薦しようとしたが、西郷は下野してしまい、その構想は実現せず、樽井は井上頼園の私塾神習舎に入る。

井上は、天保十(一八三九)年二月に江戸神田松下町で生まれている。井上家は、代々神田で医業に携わっていた。文久元(一八六一)年に易学者の稲垣新右衛門の紹介により、平田篤胤の養子鐵胤(かねたね)に入門を請うている。この結果、井上は篤胤没後の門人となり、古学研究の一步を踏み出した。さらに、元治元(一八六四)年には、皇国医学を学ぶために権田直助に入門している。井上は、学問を追求しただけでなく、勤皇志士として実践も重視していた。

西洋思想の伝播により、祖先崇拜、敬神忠君の国民性が破壊されるのを憂え、皇国学の振興を目指した井上が明治四年(五年説もあり)に開いた私塾が、神習舎である。やがて、明治十五年六月には、我が国古来の道義を究明し、国体の尊厳を明示するため、鐵胤門人の松野勇雄らとともに皇典講究所を設立している。

さて、神習舎に入った樽井は、井上門下の旧会津藩士永岡久茂、旧飢肥藩士稲津南洋(稲津濟)、旧鹿児島藩士海老原穆、旧津軽藩の家老杉山龍江らから大きな影響を受けること

になる(田中惣五郎『東洋社会党考』新泉社、昭和四十五年、八十二頁)。彼らとの交流を通じて政治意識を高めた樽井は、次のような建白書を次々と書いている。

- ①「艦将修練、俳優改正、虚文之書廢之議」(明治六年十二月二日)
- ②「海軍水夫、劇場俳優ノ議」(明治六年十二月二十五日)
- ③「劇場之再議」(明治七年一月二十三日)
- ④「設選挙院議」(明治七年五月二日、同月八日)
- ⑤「設選挙院之再議」(明治七年八月七日、十月七日)

これらの建白書を分析した高木知明氏によると、①、②、③には、明治の新政の目標と方策、④と⑤には藩閥による有司体制への批判とその克服の方策が述べられている。④では、明治六年の政変以降の政治的混乱を批判し、「奸邪の臣朝権を専らに」したのが混乱の原因だとして、その責任を追及している。

明治十年二月に西南戦争が勃発すると、樽井は永岡久茂、杉山龍江らとともに、奥州へ募兵の旅に出ている(鈴木正「解説 東洋社会党の創設者―樽井藤吉」『東洋社会党考』三百七頁)。

ところで、樽井が井上の神習舎に入門したのは、天誅組に関わった勤皇志士とのつながりからだと推測される。天誅組と井上とを繋ぐ中心人物が、勤皇画士・富岡鉄斎である。鉄斎は、井上と同じ平田門弟の大国隆正の弟

子であった。麗澤大学教授の欠端實氏が指摘している通り、井上と鉄斎は矢野玄道を介して早い時期から結ばれ、明治元年から二年にかけては、ともに語り合うべき多くの時間を持っていたと考えられる(欠端實「廣池千九郎におけるアイデンティティの確立」『モラロジー研究』平成十七年九月、五頁)。

一方、天誅組の藤本鉄石は鉄斎の先輩であり、松本奎堂は鉄斎の友人であり、ともに深い交流があった。

アジア的価値観Ⅱ道義に支えられた平等思想

明治十五年五月、樽井は東洋社会党を結成する。「社会党」と名乗ってはいるが、外来思想としての社会主義とは無縁であり、勤皇志士としての行動を支えた道義国家日本の理想の体現を目指したものだといつて良い。党則第七条には、次のような表現が見られる。

「東洋文明の氣運茲に東洋社会党を鑄造す、東洋社会党諸君、我東洋社会党は諸君の力に因て興るに非ず、予が誘導を以て成るに非ず、東方文明の照光に蒸発する吾人が腦漿、相感合凝和して垂天の雲となり一味の雨となり、平等の徳沢を社会に流さんと欲する所なり」、「予が中心は仏子の如く慈眼常に公衆を見ん、予が中心は太陽の如く光明遍く社会を照さん、其平に偏ならざるは、予が天与の性情に出る所なり」、「予が奉ずる所の君主は一の道義のみ、道義亦予を制する能はず、予が腦裏は則道義なればなり」

ここには、樽井の目指す平等思想が、道義を中核とするアジア的価値観に支えられていることがはっきりと示されているとともに、皇道だけでなく仏教などの東洋思想の普遍性を幅広く動員しようとする樽井の意図が表れている。右の党則第七条にある「一味の雨」とは、分け隔てのない仏の広大な慈悲の現れのことである。

樽井は、明治十五年七月に開催された政談会での演説では、天照大御神とは太陽のことであり、太陽が「尊卑ノ區別ナク」照らすところこそが平等だと述べている。さらに、阿弥陀仏は道徳の異名だとして、東洋社会党はこの道徳を以て成立したと説明している(高木知明「東洋社会党に関する一試論」『日本歴史』平成二年十二月、六十八頁)。赤松克麿は、東洋社会党の綱領に示された道徳、親愛、平等などの観念は、すべて東洋思想が根底をなしていると書いている(赤松克麿『日本社会運動史』日本通信教育振興会、昭和二十四年、二十六頁)。

樽井は、東洋社会党の理念として「親和」を重視していた。例えば党則第六条には、「我党旨を拡張するに親和を以て宗とすべし」と、また第十一条には、「社会党と称するは大なる親和党と曰う義なり、社会は人々の相親和鳩合したるを指す称なればなり」とある。樽井が東洋社会党を大和党と呼んでいた形跡さえある。樽井にとって「大和」は、「大いに和する」という日本の理想を示す言葉である

と同時に、「あらゆるものの母胎となる」という意味を含む格別の言葉であった。

東洋社会党は、明治十五年六月二十日に禁止されたが、樽井はなおも運動を完全にはやめず、翌年一月二十五日に党則を印刷配布したため、禁固一年の刑に処されている。注目されるのは、副島種臣が娘婿の諸岡正順を通じて、政府に禁止された東洋社会党に支持を与えていたことである。樽井は、「諸岡正直氏は元佐賀人なるが、其叔父副島種臣の命を含み、東京より来られ、大いに社会主義を鼓舞せらるゝや、予は大いに意志を強うせり」と書いている（『東洋社会党考』二十八頁）。

出獄後、樽井は頭山満、平岡浩太郎ら玄洋社の志士たちとの関係を深めていく。明治十七年暮れには、平岡らに協力して上海で東洋学館の設立に動いていたが、上海滞在中、朝鮮開化派リーダーの金玉均が日本に亡命したことを知り、急遽日本に帰国する。

樽井、福澤諭吉、玄洋社の志士たちは、それぞれの立場で金に対する支援に取り組んでいた。頭山らは朝鮮に義勇軍を送る計画を立てたが、その最中の明治十八年十一月、朝鮮の親清派政府を倒し、その勢いをかりて日本の改革を推進しようとした自由党左派の大井憲太郎らの計画が発覚した（大阪事件）。この事件で、樽井も大井の一味と疑われて投獄されている。だが、大井とは別に、樽井は独自の構想によって金への支援を試みていたのである。それを支援していたのが、吉野の

土倉庄三郎であった（琴秉洞『金玉均と日本』緑蔭書房、平成十三年、二百十一―二百十三頁）。

土倉は、天保十一（一八四〇）年四月、吉野郡大滝村（現吉野郡川上村大滝）の山林地主の家に生まれた。土倉家は、家伝によると、楠木正成の三男正儀の子に始まる。「大山林王」と呼ばれた通り、彼は吉野を日本一の林業地に育て上げ、その財力を自由民権運動につき込んでいた。板垣退助が外遊した際には、その費用のほとんどの二万円を出したともいう。ちなみに、土倉は同志社創立の際に支援した新島襄を介して、頭山満とも強い糸で結びついていた（松本健一『どぐら綺譚』作品社、平成五年、百四十一頁）。

『大東合邦論』に込められた理想

大阪事件で投獄される前に樽井が書き上げていたのが、『大東合邦論』である。しかし、この原稿は投獄によって没収されてしまった。そのため、樽井は明治二三年に、朝鮮半島や中国でも読まれるようにと、漢文で再稿した。その際に、副島種臣の教示により、北海道開拓で知られる岡本章庵の指導を受けている。翌年、中江兆民の主宰する『自由平等経緯』誌で連載し、それをもとに明治二十六年八月に同書は刊行されている。

実は、福澤は、金玉均によるクーデター（甲申政変）の失敗を契機に、朝鮮の改革に悲観的になっていき、明治十八年三月には、『時事新報』に「脱亜論」を載せるに至る。まさに、

金支援に関わった樽井と福澤は、ほぼ同時期に対照的な結論に到達していたのである。樽井は、福澤らの主張を意識し、『大東合邦論』

の中でも、「近来に於ける大院君の一挙や、金玉均の反乱は更に両国の感情を害するものであり、どうして両国の提携和親を望むことが出来ようなどと云ふ論を為す。かくの如きは、過去の小過にこだはつて、将来の大計を失ふものにほかならない」と書いている（『現代訳・大東合邦論』（『影山正治全集 十七巻』影山正治全集刊行会、平成四年）五十七頁）。樽井が『大東合邦論』を着想したきっかけは、玄洋社を訪れ、万国公法を読んだことにある。「瑞西の中邦は、普王の領土でありながら猶且つ瑞西連邦の一に加つて居る」という箇所を読み、日韓の合邦を思いついたという（『東洋社会党』百六十一頁）。また、『大東合邦論』執筆においては、玄洋社のブレイン的存在であった香月愨の協力を得たとされている。

『大東合邦論』は、「序言・国号釈義・人世大勢上・人世大勢下・世態變遷上・世態變遷下・万国情況・俄国（ロシア）情況・漢土情況・朝鮮状況・日本状況・日韓古今之交渉・国政本原・合同利害・聯合方法・論清国宜与東国合縦」という十六の章から成る。その主眼は、第一に列強の進出に対するアジアの共同防衛であった。「ヨーロッパ人の侵略的野望は実にたくましいものがある。彼らが東亜の地をねらつて居ることはまことに久しい」と書いて

ている通り、樽井は列強の進出に対して強い警戒感を示していた。

「かの白人の黄人に対する圧倒的大攻勢に對しては敢然として抗しなければならぬと考へて居る。黄人勝たなければ、遂にすべて白人の奴隸とされてしまふだけだからである。これに勝つる道は、ただ同人種一致團結して、一大勢力を養ふことのみである」とも書いている。また、樽井は次のように述べる。「西洋人は『東方二海陸に強国あり』と稱して居る。日本とシナを指すのである。幸ひに此の二強国があつて我が東亜黄色人種の威厳を保つて要る。もし黄人中、此の二国が無かつたならば、白人勢力は早くすでに我がアジア全州を蹂躪し、我が兄弟の黄人すべてを奴隸化してしまつてゐたであらう」

『大東合邦論』が日本のアジア侵略の理論的根拠とされたなどというのは、全くの曲解である。樽井は列強に対抗して、日本が同様の政策を採用することに反対しており、「領土擴張方式」は見込みがないと明確に記している。日韓合邦後の政体については、一種の連邦制を取り、日本・朝鮮の対等性が維持できるよう「大東」という新国名をつけようとしていた。

樽井の狙いは、歴史的に深い交流があり、文化的にも多くの近親性を持つ日韓両国の関係を強めること自体にあった。彼は、「我が大東両国は、僅かに一葦帯水をへだてて相隣り、晴天の日には互ひに山嶽を望むことがで

きる。太古の時代から、飛鳥相往来し、草木の果実は互ひにその海岸に漂着した。人間の交渉に於てももちろんである、「両国人の固有信仰の点でも甚だ類似して居り、人種的にも全く同種であること疑ひない」と書いている。

日韓両国にとつて「東」の一字が深遠な意味を持つと認識していたからこそ、彼は「大東」という名称を冠したのである。彼は、「日本」の国号は「東方」の義に基づき、長く「東」の字を以て国の別号としてきたし、「朝鮮」もまた「東」の字を国号としてきたと理解している。そして、樽井の日韓合邦論は、日韓のみで完結するものではなく、日韓の連携を基盤にして、日中韓三国の連携へと進み、次にアジア全体の連携、さらには人類全体への連携へと進むという構想であった。影山正治は、『大東合邦論』の根本主旨は、『世界連邦』実現の大理想を前提としての『アジア連邦』実現を考へ、その『アジア連邦』実現の前提として先づ『日韓連邦』の実現を念ずるところにあつた」と書いている。

こうした理想主義的主張は、樽井の「親和」、「大和」の思想と不可分である。彼は、「我が日本人としては、もとより親和を以て根本信条とし、大和の道を以てあらゆる人種と交つてゆくことを念願として居る」とも書いている。

現在、東アジア共同体設立に向けた動きが進展する中で、中国主導のアジア連帯を警戒する論調も高まっている。確かに、今日様々な立場からの東アジア共同体支持論があり、支持の理由を吟味してそれぞれの主張を評価する必要があるが、東アジア共同体支持論すべてを否定してしまうことは、東亜諸国が「大和主義」的理想を共有し、西洋近代の価値観を乗り越えていこうという、樽井ら維新派の理想を捨て去ってしまうことにもなりかねないのでなかろうか。樽井は、あれほど金玉均支援に熱意を示していた福澤が、ついには脱亜論に行き着く過程を目撃しており、アジア連帯の難しさも熟知していた。しかも彼は、わざわざ西洋人識者の現代シナ観を詳しく紹介し、「シナの現状には悲観的な面が多い」とも結論づけていた。それでも、彼は理想を手放さず、次のように期待感を語っていたのである。

「シナは東亜の古国である。文物制度の盛んなること四隣に先んじてゐた。我が国もまた嘗てシナに学び、以て自国の政教に資した。益友と云ふべきである。ことに、その国土は唇齒の關係にあり、その人種は同一である。これ先天的な深縁であり、避くべからざるものの上に立つて居る。よろしく日支両国は、相親睦して、共に手をたづさへて富強開明をはかるべきである」、「シナ盛んなれば、則ち我が国、利を受け、衰へれば則ち害を受ける。その盛衰興亡、直ちに我が国に絶大に影響す

ることを察すべきである」

葦津珍彦は、『大東合邦論』に示された東亜連帯論を次のように評している。

「日韓両民族の同等親和、相互敬重の大切なことを力説してゐるが、それは決して政策的な駆引きや外交的儀礼から出たものではなく、熱烈な真情の流露であることを信じさせる力がある。著者は、清国や韓国の国民について、国家の現状について、遠慮のない批判も加へてゐる。かれは形式的な社交辞令を用ゐない。しかしそこには、決して人種的偏見がない。あくまでも親愛なる対等の兄弟としての真情をもつて語つてゐる」(葦津珍彦『大東合邦論』と日韓合邦『不二』第十八巻第三号、十六〜十七頁)。

やがて、清国では梁啓超が『大東合邦論』を『大東合邦新義』という書名で無断で刊行し、ある程度広く頒布されたという。また、李容九は若い頃に『大東合邦論』を読み、それに共鳴していた。これが、彼が日韓合邦運動を展開するきっかけになつていく。

維新発祥地としての五條への思い

『大東合邦論』刊行の前年の明治二十五年、樽井は衆議院議員に初当選している。この際、樽井を援助したのも、金玉均支援以来の協力者、土倉庄三郎であつた。

だが、樽井は議員としての活動にも限界を感じていたに違いない。葦津珍彦も、「鉄道、製鉄、造船、病院等の国有論を主張した。し

かしかれの主張は議會では、ほとんど問題にされなかつたらしく、かれは議會での政治活動には望みを棄て」と書いている(前掲十四頁)。

先に述べた通り、樽井は禁固一年の刑に処せられ、東洋社会党の活動は頓挫したものの、東洋思想を基盤とした独自の社会主義思想はその後も持続していた。明治二十四年一月に発表した一連の『請願書』には、民間の鉄道、鉱山、郵船などを買い上げて「公同民社」に移管するという一種の国有化政策採用の請願も含まれている。また、教育に関しては、「貧民の子弟と雖必ず小学に入らしむる法制を定められたき」とする請願を作成している。

一方、国粋派、国民論派の社会主義思想も次第に広がりを見せていた。陸羯南もまた君民同治の美風に基づいた独自の社会主義思想を模索していた。明治三十年四月には、社会問題研究会が発足し、樽井のほか、陸、三宅雪嶺、福本日南、酒井雄三郎、幸徳秋水、片山潜ら論客たちが結集している。この時期、樽井は堺利彦の紹介で「国有銀行論」を『太陽』に発表している(鈴木正「東洋社会党と樽井藤吉」『アジアと日本』農村漁村文化協会、平成十九年、二十九頁)。また、政教社グループの『日本人』に頻りに寄稿するようになり、例えば明治三十一年二月二十日には、「社会主義国業篇」を載せ、従来の主張を發展させて、各産業を統括する一大公司を建設し、公衆の便益となつていない民間事業を移管する

ことを主張している。また、明治三十一年七月二十日号には、「社会主義国業保険論」を発表している。さらに、樽井を中心として協同親和会が発足し、当時社会問題となっていた足尾の鉍毒問題解決に取り組んでいる。松村介石も会員の一人で、幸徳秋水も出入りしていたという。

樽井の立場は十三歳の夏に衝撃を受けて以来、勤皇志士の精神の追求という点で、いささかの揺らぎもなかったのではなからうか。晩年の大正八年、彼は『明治維新発祥記』を著している。その序文で、徳富蘇峰は次のように樽井を称えている。

「大和の遺老樽井藤吉君は憂時慨世の士也、君平生天忠組の事跡に感ずる所あり、考拠数年其の忠烈を表彰し、名けて明治維新発祥記と曰ひ、更に一大銅標を建立し、之をして国民教育の標準たらしめんとす、嗚呼君の志を国家に存する深且厚と謂ふべし」

ここに述べられた通り、樽井は天誅組が本陣を構えた桜井寺に、住職の康成師らの協力を得て、「明治維新発祥地記念碑」を建立する運動に乗り出していた。

保田與重郎は「五條が、明治維新発祥地となつたことは、見方によつては、建武中興発祥地の伝統をうけたものである」と書いている（『南山踏雲録』新学社、平成十一年、七十三、七十四頁）が、樽井もまた五條が明治維新発祥地となつたことを、むしろ必然だと考えていたのかもしれない。同時に、彼は

五條に生まれたことを終始意識し続けようと、吉野川と丹生川という二つの川からとつた号「丹芳」を用いていた。

しかし、議員を辞した後の樽井は、満州や朝鮮で鉍山経営を試みたものの成功せず、不遇の時代が続いていた。それでも、天誅組に象徴される勤皇の志士たちが目指した、日本の理想的統治に普遍性があることを疑わなかったからこそ、彼は時代に流されることなく、苦境に耐えて自らの立場を堅持したのではなからうか。晩年、樽井には小原歌という同棲相手がいた。彼女は、樽井を次のように振り返っている。

「え、人や、え、人やけれど金が無い。よくしてくれるんだが金とること知らん人やさかいな。朝鮮でも大きい鉍山を持つて居たのや。今は随分儲かつて居ると言ふことやが、それなどもいつの間にか人に取られて仕舞ふは」（『東洋社会党考』二百五十三頁）

亡くなる前日の大正十一年十一月二十四日、樽井は大きな竹の杖をついて、歌のところに訪ねたという。そして、いろいろ厄介になつたと言つて帰宅した。翌二十五日、樽井は寂しく七十三年の生涯を閉じた。靈安寺村の満願寺で営まれた葬儀に会葬する者は僅かだったという。

アジア主義に生きた杉山家の伝承② 杉山満丸

二〇一五年、福岡市のある会で、私は杉山三代について講演する機会を与えていただきました。その会には、福岡の名士の方々が多数参加されておられました。

一通り話が終わって、ある方から、「孫文を支援したと言うことですが、見返りはなかったのでしょうか？」という質問がありました。さらに、別の方から、「なんの見返りもなく支援したこと自体が、今の我々の感覚では理解できないんですよね」と言葉が続きました。

私は、驚くとともに、情けなくなつてしまいました。感情を抑えて応対させていただきました。

玄洋社の地元福岡でも、その頂点近くで活躍されている多くの教養をお持ちの名士の方々でさえ、玄洋社並びにその活動に賛同し支えた人々への理解がなくなっていることに驚きを禁じ得ませんでした。さらに、「玄洋社は、国権派でしょ。…」という言葉が続きました。はつきり記憶していませんが、国の権力におもねつて、植民地を増やす先兵となつてテロなどを行った。…というような発言があったと記憶しています。

その時、私をその会を紹介してくれた友人が、「とにかく、杉山君のお父さんの龍丸さんはインドを支援して、全財産を失っている

のは間違いがないことだから…」と語ってくれました。すると、首長経験者の方が、「そういえば、インドに行ったときにあなたのお父さんの話は聞きました。何とかしてやりたいなと思つていましたが、そのままになってしまいました。」と発言をいただきました。

もう一つ、例を挙げると、

「杉山龍丸さんは、太平洋戦争の罪を償うためインドの支援をされたのですか？」

親しくさせていただいていた、或るテレビ局関係者からのこのようなメールをいただきました。私は、「そんなことあるはずがない」と心のなかで叫びながら、動揺を抑え平静を装つて穏やか返信しました。「そんなことはありません。祖父の夢野久作や曾祖父の杉山茂丸からの教え『杉山農園の土地は私物化することなくアジアのために使え』を忠実に守つて生涯を終えただけです」と。

実は、私も、杉山家の土地が切り売りされてどんどん狭くなつていくのを見ながら、父・杉山龍丸から「杉山家の土地は一切おまえのために遺さない。その代わり自由に生きろ」という言葉を浴びせられ、インドのために土地を使い切るといふのは、今の状況から抜け出せなくなった父が作り出した話だろうと思つていた時期がありました。

しかし、父の死後、父の福岡中学時代の同級生で、前福岡市長の桑原敬一氏の叔父さんにあたる桑原廉敬氏から直接次のようなお話

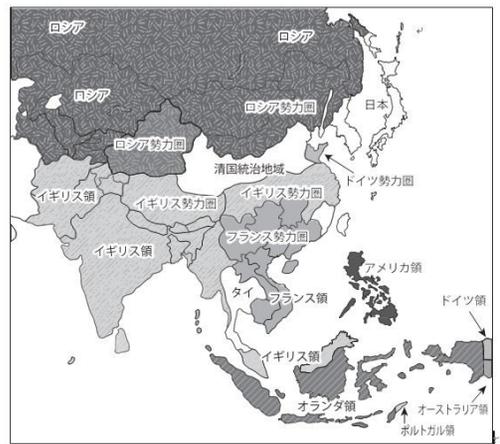
をお聞きし、父への想いを強くすることになりました。

それは、「戦後、負傷して帰国した父・龍丸が、自分の後数年の命しかないと言われたから、アジアのために杉山農園の土地を使ってもらうように、土地を全部福岡市に寄付した」というお話です。寄付を受けた福岡市は、地元企業といっしょにゴルフ場を造ろうとします。おそらく、近くの雁ノ巣にあったといわれる進駐軍の基地からの要望もあったのではないかと思うのですが、それでできたのが今の和白カントリー倶楽部だそうです。その話に激怒した龍丸は、福岡市に怒鳴り込んだというのです。しかし、すべての土地を返してはもらえずに、ゴルフ場用地を除いた約三万坪が返されたそうです。昭和二十年代の中頃、企業の社長が当時の金で四百万万を持って上京し、桑原さんは、「受け取るしかないだろう」と父の背中を押したそうです。

その後、父は偶然会った士官学校の同級生からインド人留学生の世話を頼まれ、何人目の留学生にガンジの直弟子の方がいて、その方のお世話をしたことから、ガンジ塾というガンジの弟子の組織とつながるようになります。インドとの交流・支援が始まります。

話が横道にそれてしまいました。孫文の話に戻りたいと思います。

次の図は明治末期のアジア東部の地図で



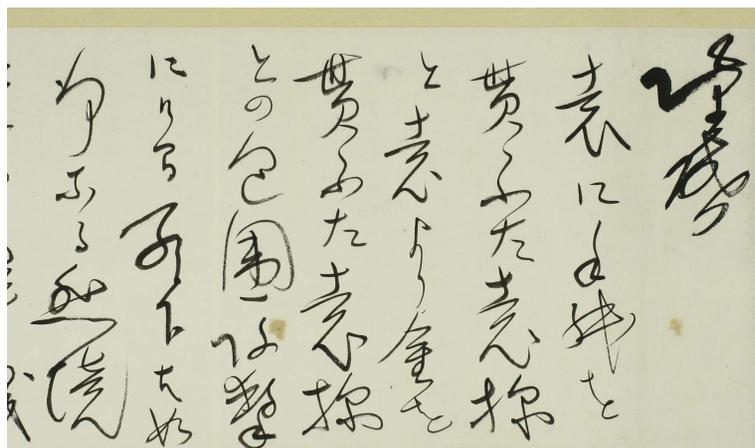
明治末期頃のアジア東部

この図を見て、皆様はどのように思われるでしょうか？

白抜きのところ以外はすべて西洋列強の植民地になっているか、又は大きな影響下にあります。あと少くもアジアはすべて白人の影響下になってしまいます。日本と清国と朝鮮のみがアジア人が支配している地域です。もし、白人の支配下になれば、奴隷もしくは奴隷に非常に近い扱いを受けるのです。白抜きの国の人々は手を取り合って自分たちの国土を西洋列強の白禍から守ろうとするのではないのでしょうか？

これが、孫文を支援し孫文とともに戦った当時の日本人の気持ちだと思えます。それが、アジア主義の原点ではないでしょうか？

私の曾祖父・杉山茂丸は、二十代中頃香港に行きました。筑豊炭田の石炭の売り込みに行ったと言われています。そこで見たものは、



杉山茂丸が大隈重信に宛てた書簡

「犬と中国人は入るべからず」という看板でした。

その後、茂丸は日本が植民地にならないように肝に銘じたと伝わっています。

茂丸は、大隈重信に書簡を送っています。その手紙は、早稲田大学古典データベースで公開されています。そこには十七通の手紙があり、その中の大正七年の手紙には、インドの惨状という写真が同封されています。植民地・インドの現状を大隈重信に伝え、同じアジア人として、インドの現状を憂慮する内容が書かれています(左)。

二〇〇七年(平成十九年)、私は福岡で、アシシュ・ナンディ氏とその甥でカリフォルニア大学教授のモハン・トリベディ氏とお会いしました。

2007年(第18回)大賞受賞/アシシュ・ナンディ氏



2007年(第18回)大賞
アシシュ・ナンディ
Ashis Nandy

社会・文明評論家(インド社会科学研究会・国家指名会員)
【インド/その他】
1937年05月13日生(70歳)

インドだけでなくアジアを代表する社会・文明評論家、個人の尊厳から国家論、文明論までを広く思索し、個人と現実世界を交差させて、問題の本質に迫る議論を展開する。市民運動にも積極的に参加する行動的知識人であり、「インドの良心」とも称されている。

※書き・年齢・経歴、掲載理由などは受賞当時のものです

モハン氏のお父さんと私の父が親しく交際していて、父が訪印したときにまだ子供であったモハン氏をすぐくかわいがったそう。で、二〇〇四年、訪日された際にわざわざ福岡まで来られて初めてお会いしました。その叔父である、アシシュ・ナンディ氏が福岡アジア文化賞の大賞を受賞され、そのお祝いに再び福岡に来られました。

私は、モハン氏とナンディ夫妻を玄洋社記念館（現在は閉館し、その資料は福岡市立博物館に寄託収蔵されている）にお連れし、ラス・ビハリ・ボースの神隠し事件と日露戦争勝利に曾祖父杉山茂丸を始め福岡の人々が大きく関わったことをお話ししました。



アンシュ・ナンディ夫妻と筆者家族

ラス・ビハリ・ボースの神隠し事件は、インド独立運動の過激派であったボースがインドで指名手配され、日本に逃れてきたときに、当時日英同盟下であった日本政府が、英国の要求によって、香港行きの船しかない1週間を狙ってボースを国外追放にし、そのボースを頭山満らが東京新宿の中村屋に匿った事件です。このときに、ボースを頭山邸から運んだ車は杉山茂丸が所有するものでした。

そのふたつの話をしたときに、アシシュ・ナンディ氏は次のように話されました。

「日本人がボースを助けてくれたことはインドではよく知られていることです。しかし、福岡の玄洋社の方々が大きく関わられているという話は初めて聞きました。本当にありがたい。日本が日露戦争に勝ったときにインドの街々がどのようになったかあなたは知っていますか？いや、インドだけではない、アジアの街々がすごい状態になったのです。私たちインド人は、日本人が日露戦争に勝つまで、有色人種は白人にかなわないと思うようになって深い絶望の中にいました。私たちは日本がロシアに勝ったことにより、私たちがイギリスから独立できるかもしれないという希望を持つことができたのです。インドの初代首相ネルーは、日本が日露戦争に勝った後に独立運動に参加したのです。このことを、日本人は知っていますか？深く意識していますか？」その言葉は、私の心に深く突き刺さりました。もし、日本がロシアに負けていたら、アジアすべてが西洋列強の植民地になり、今もその状態が続いているかもしれません。日露戦争での日本の勝利こそが、植民地化を進めていた西洋列強が行った侵略のターニングポイントになったのです。そのことを、もともと日本の歴史の中に刻まなければいけないという想いを私はその時に心に刻みました。



杉山茂丸所有の車

曾祖父・杉山茂丸は、表の歴史には現れませんが、日露戦争に大きな足跡を残しています。杉山茂丸は桂太郎・児玉源太郎らと暢気俱樂部というものを創り、日露戦争開戦の準備をしていました。そして、日露戦争の幕引きも、茂丸から山県有朋などへもたらされた情報によって始められたと伝えられています。（杉山茂丸『俗戦国策』書肆心水 一九二九年）

杉山茂丸の幼馴染と言われる明石元二郎は、ロシアを内部からかく乱するため、ヨーロッパに渡ってレーニンに接触し、革命資金を渡したと言われています。

杉山家には「革命に民衆を巻き込むために社会主義を使う」とレーニンが語った」という話が遺っています。

日露戦争の幕引きをおこなったのは、福岡出身の金子堅太郎の活動によるものでした。金子堅太郎はアメリカ・ハーバード大学に留学していたときに、日露戦争当時のアメリカ大統領であったルーズベルトと学友であり、

この関係によってルーズベルトが仲介に立ち、戦争の終結がおこなわれたと聞いています。

日露戦争に関する杉山家の口伝は、他にもあります。資金が足りなかった日本が、ユダヤの実業家に日露戦争の戦争債を買ってもらうための下交渉を杉山茂丸がおこなったというものです。その際に、日露戦争後の満州の権益の半分をユダヤ資本に譲るという密約があったと伝わっています。

私が学生の頃に龍丸から聞いた話では、茂丸は満州にユダヤの国を創ろうとしていたというのです。これは1930年代の「河豚計画」というものに繋がったのかもしれませんが、私見ですが、ユダヤ民族との関係を構築し、ユダヤ民族の国を満州に構築することによって、

- 1、日本は日露戦争の戦費を心配することなく戦うことができる
- 2、ユダヤ民族との関係がよくないロシアの南下を抑えることができる
- 3、国際的に特異な民族であるユダヤ民族と日本が手を握ることによって、日本の海外進出のパートナーができる

ユダヤ民族の得意な分野は金融であり、日本人が得意とする分野は製造ですから、ちょうどいいパートナーとなりえたと思います。またユダヤ民族と日本人には、鳥居のかたちや神輿など伝統的な文化にいくつもの共通点

があるとも言われています。

結論から言うと、日本とユダヤの密約は実現することはありませんでした。

日露戦争後に満州を訪れたアメリカの鉄道王ハリマンの態度に怒った通訳の話が、小村寿太郎に伝わり、小村寿太郎が密約の実行を断つたためとされていますが、今の私には詳細は判りません。ユダヤとの約束は神を介した約束と言われるそうです。その約束を反古にすれば、それに見合った罰が下るのだそうです。真実はわかりませんが、これに怒ったユダヤの人々が、太平洋戦争へと日本を追い込んでいった（オレンジ計画と言われるものかもしれません）という話もあります。

太平洋戦争時、ポーランドなどからユダヤ人を脱出させた杉原千畝や、満州でユダヤ人を救った松岡洋右などの話がありますが、これはこのときの約束を償うためにおこなわれたのではないかと私は思っています。松岡洋右は杉山茂丸に師事した人物であり、杉原千畝も松岡洋右との関係があると言われているからです。

話は少しありますが、福岡出身で唯一の総理大臣経験者である広田弘毅が外相の折、杉山茂丸の庭と広田弘毅の外務大臣公邸がつながっていて、毎晩のように広田外相が茂丸のところに来たという話が残っています。最近聞いた話では、トンネルが掘られて繋がっていたそうです。

今の私には確かめようもありませんが、そ

れだけ、杉山茂丸が外交問題に詳しくあったということではないかと思えます。

二年ほど前に私が講師を務めたある講座で、このユダヤとの密約の話を見せていただいた後の懇親会の席で、主催者の男性がこんな話を始めました。

「私はアメリカで二十年ほど金融関係の仕事をしていました。そのときに仲良くなったユダヤの名家・ヤコブ・シフの子孫の方から、十年前、今日杉山さんが話された話と同じ話を聞いたことがあります。だから今日のお話には驚愕しました」

私は何とも言えない感覚に見舞われ、言葉がありませんでした。

最近このようなお話をすると、杉山茂丸はユダヤに魂を売った日本人のルーツだと考える方がいらつしやるようです。当時の国際情勢は現在とは大きく異なっていますし、当時の日本人の大多数はお国のために命を捧げる覚悟があり、私利私欲のために人生を生きた人は非常に少なかったのではないのでしょうか。現在の感覚から安易に判断するのではなく、その人物の人生の足跡を調べることが必要だと思っております。

写真について、前坂俊之氏（元毎日新聞東京本社情報調査部副部長・元静岡県立大学教授・夢野久作と杉山三代研究会会員）のホームページより引用したものを紹介します。

（日露戦争末期）奉天会戦に勝利した日本は講和を決定し、ルーズベルト米大統領に斡旋を依頼した後、明治三十八年（一九〇五）七月、山県有朋参謀総長ら大本営陸軍部将校一行が、極秘裏に満州に渡った。奉天総司令部に各軍司令官を集め、戦争終結を伝えるためであった。

この山県の渡満は最高の軍事機密として厳重な緘口令がしかれた。七月十四日、一行は新橋駅を発ち、神戸で偽装した御用船「河内丸」に乗り込んで大連に密かに出航した。その出航間際に水上艇に乗った一人の民間人がノコノコと乗り込んできた。杉山茂丸である。乗船するや杉山は山県のキャビンに入って密談し、出てこない。将校たちは「一体、何者なのか」と、啞然とした。奉天の満州軍総司令部に到着すると、一行は別々に部屋割りされたが、杉山は児玉源太郎参謀長の宿舎に泊まり込んだ。参謀本部員でも容易に入ることのできない最高指揮官のシークレットルームである。

実は桂太郎首相、児玉、杉山は密かに秘密結社を結んでおり、児玉と杉山は一心同体で固く結ばれていたのである。

二人は寝食を共にしながら、極秘の計画を練り上げた。児玉は杉山に日本軍占領地の全鉄道の地図、資料を見せ、その維持管理をどうするか、基本プランの作成を命じた。



山県有朋一行とともに河内丸に乗り込んだ茂丸

杉山は二週間、不眠不休で作成し、政府の出資金一億円、民間からの株式公募一億円の計二億円の資本金、鉄道、沿線付属地の炭鉱経営を含めた南満州鉄道株式会社の設立計画案を山県に上申した。杉山こそ明治国家の影の参謀役だったのである。



満州・奉天で児玉源太郎・右と杉山茂丸

「東洋経綸の魁、平岡浩太郎」

浦辺 登

孫文の墓参

大正二（一九一三）年三月十八日、孫文は墓参で博多・聖福寺を訪れた。早くから革命を支援してくれた平岡浩太郎への感謝の気持ちを表明するためだった。残念ながら、平岡は中華民國の建国を見ることなく、明治三十九（一九〇六）年十月二十四日に亡くなった。何でも一番でなければ気が済まない



孫文の平岡浩太郎墓参『頭山満と玄洋社』から

平岡だけに、さぞかし、孫文の偉業に立ち会うことができなかつた悔しさは人一倍だったろう。

平岡は嘉永四（一八五二）年六月二十三日、福岡城から西の方角にある地行五番町に生まれた。この界限は福岡藩の下級武士が多く住む場所だったが、面白い事に、この地域からは平野國臣（幕末の志士）、金子堅太郎（農商務大臣）、福本日南（ジャーナリスト）、中野正剛（玄洋社員、衆議院議員、元朝日新聞）という著名な人々を輩出している。

この地行には鳥飼神社という神功皇后伝説の社がある。中野正剛の銅像が佇立していることでも知られるが、その鳥飼神社前の通りを少し東に進むと、平野神社という平野國臣を祭神とする社があり境内に平野君生誕地碑があるが、その裏面の撰文は金子堅太郎によるものである。いわば、幕末から近代が凝縮された地域とでも言うべきか。

平野國臣の父は福岡藩の武術師範としても知られるが、平岡は平野の父吉郎兵衛に剣術を習った。平野國臣は幼少の平岡を膝に乗せ、平岡は平野の髻を引っ張るなどのイタズラをして遊んだ仲だった。「この子は大きくなったら、立派な大人になるだろう」と國臣は平岡を評した。

ちなみに、福本日南も自身が描いた武者絵を平野に誉められたという逸話が残っている。

幕末の福岡藩

幕末の倒幕運動では、全国の志士に向けて平野國臣がオルガナイザー的役目を担った。獄中から西郷隆盛に倒幕を決意させる紙綴り文字の書簡を送ったこともある。獄中での平野は墨、硯、筆を取り上げられていた。便所の落とし紙を紙綴りにして文字を象り、飯粒を糊にして手紙に仕立てた。勤皇僧月照を薩摩の西郷のもとに送り届ける役目も平野だったが、文久三（一八六三）年の「八月十八日の変」で長州に下った七卿の一人、澤宣嘉と生野で決起し失敗。京都六角で平野は獄死した。

平野や平岡が属する福岡藩でも慶應元（一八六五）年に「乙丑の獄」と呼ばれる政変が起き、筑前勤皇党党首である家老の加藤司書以下、多くが斬罪に処せられ、野村望東尼は島流しにあった。月形洗蔵らが画策していた薩長和解、同盟が結実する寸前であっただけに、筑前太宰府の延寿王院に移転していた三條実美以下五人の公卿も窮地に立たされた。しかし、坂本龍馬が継承者として薩長同盟が実現し、慶応三（一八六七）年十二月、王政復古の大号令とともに明治維新の大事業が成就した。この後、若輩ながらも、平岡浩太郎は福岡藩兵の一員として東上した。

西郷との出会い

「乙丑の獄」という政変により、佐幕派とみなされた福岡藩は維新のバスに乗り遅れた。それでも討幕軍を編成した福岡藩だったが、ここで「何でも一番」という平岡の傲岸不屈な性格が奇縁をもたらした。

ある日、千代田城（江戸城）桜田門の歩哨に平岡が就いていた時だった。偉軀雄貌巨眼豊頬の士が騎乗のまま門を通過しようとして。突然、平岡はその馬前に飛び出し、轡をとって馬上の人物にきつく誰何した。

「予は西郷なり隆盛なり」
それを聞いて慌てて平岡は一礼し、西郷を通した。

其の日の夕方、西郷は衛兵詰所を訪ね平岡を呼び「歩哨の任務は非常に重いものであり、軍務に就く者はすべからく君のような心がけが大事だ」と誉めた。休日には邸に遊びに来なさいとまで声をかけられた平岡は、西郷の度量の大きさに感服し、以後、西郷を崇拜するようになった。

明治十（一八七七）年、西郷が鹿児島で決起する。「征韓論」で下野し、鹿児島に帰っていた西郷だったが、その決起に旧福岡藩士も呼応し、平岡も加わった。しかしながら、旧福岡藩士たちは政府軍に追討され、平岡は包圍を潜り抜け薩軍陣地に飛び込むことができた。

玄洋社の初代社長になる

西南戦争後、賊軍として監獄生活を送った平岡だったが、同じく牢獄から放たれた頭山満、進藤喜平太、箱田六輔らと自由民権運動団体の玄洋社を興した。その成立は明治十二（一八七九）年十二月であり、玄洋社と歩を一にする筑前共愛公衆会も同時に成立している。この筑前共愛公衆会の会長は三木隆介（小野隆助）、副会長は箱田六輔だが、ともに玄洋社員であり、民間による自治組織として画期的だった。

平岡はその玄洋社の社長選挙に名乗りをあげたが、頭山満が当選した。生来の面倒くさがり屋の頭山が固辞したため、何でも一番の平岡と箱田の両名が初代社長の座を巡って争いを起こした。それを裁定したのが人參畑塾こと興志塾の高場乱（男装の女医）だった。恩師でもある高場の意見を入れ、初代社長には平岡が就任した。

しかし、何でも一番になりたがる割には、早々に社長の座を降り、実業の世界に飛び込んだ平岡だった。西南戦争で薩軍に身を投じたものの、軍資金が枯渇すれば戦えない。その悲惨さを知る平岡は、玄洋社の活動資金捻出のため炭鉱経営に邁進した。

一般に玄洋社は「右翼」という極めて曖昧な言葉に集約される。しかしながら、その実態を「玄洋社員名簿」（石瀧豊美 編纂）から眺めてみると、六三〇名の社員が登録され、

その職業区分からは、とても「右翼」集団とは思えない。

郵便局員、用務員、商店主、銀行員、会社員、教員、警察官、軍人、医者、僧侶、神官、炭坑業、新聞記者、自治体首長、企業経営者、市会議員、県会議員、国会議員などである。「浪人の王者」と称された頭山満にしても、『日本の石炭産業遺産』（徳永博文 著）によれば、渋沢栄一、岩崎弥太郎、吉田茂などと共に炭鉱開発業者として列記されている。

東洋学館を興す

玄洋社は「西郷精神」の継承を自認するが、その西郷の意を継承し、明治十七（一八八四）年、上海に「東洋学館」という学校を設けた。そこには玄洋社員、熊本の相愛社の若手などが送り込まれ、語学の習得、大陸情勢の研究を行なった。この「東洋学館」設立には平岡浩太郎（玄洋社）、中江兆民（土佐自由民権思想家）、末広重恭（朝野新聞主筆）、長谷場純孝（文部大臣）、佐々友房（済々黌）、杉田定一（越前自由民権思想家、衆議院議員）、植木枝盛（民権論者）、大内義瑛（玄洋社）、樽井藤吉らも参画した。樽井は日本と朝鮮との対等合邦を説いた『大東合邦論』でも知られる（東洋学館については、本号二十二頁、「史料・東洋学館趣旨書」を参照のこと）。

しかし、東洋学館は資金難から一年を経ずして閉校に追い込まれる。それでも平岡は諦めきれず、上海に製靴店を設け、関屋（谷）

斧太郎（玄洋社）たちに情報収集を継続させた。同時にこの頃、漢口楽善堂の活動も始まっている。「漢口楽善堂の歴史（上）」（大里浩秋 著）には、大陸の情報収集活動に従事していた伊集院兼雄大尉から荒尾精（当時参謀本部所属の陸軍中尉）に引き継ぎがなされたとの記述が見える。この漢口楽善堂には東洋学館の学生たちも参加し、山崎羔三郎（玄洋社）の名前も見えるが、箱田六輔、平岡浩太郎、頭山満も漢口楽善堂運営の相談にのった。この漢口楽善堂は後の日清貿易研究所へと発展するが、ここで忘れてはならないのが岸田吟香である。岸田は上海を拠点に薬品と書籍の

販売を行なう楽善堂を開いていたが、荒尾精たちは楽善堂漢口支店としての事業だった。岸田の支援なくして漢口楽善堂の存続は困難だった。

余談ながら、代表作『麗子像』で知られる画家岸田劉生の父が吟香になる。

日清貿易研究所を興す

日清貿易研究所は、日本と支那（中国）との人的交流、経済興隆によって、東洋の安定を目指す人材を育成する学校だった。漢口楽善堂メンバー荒尾精が中心となったが、若き日の荒尾は西郷隆盛の書生として一つ屋根の下で過ごした事もある。

残念ながら、この日清貿易研究所は日清戦争勃発によって閉鎖された。日清戦争は明治二十七年（一八九四）年に始まったが、この清

国との戦争に駆り出されたのが日清貿易研究所の学生、職員だった。陸軍通訳官として従軍した山崎羔三郎、鐘崎三郎、藤崎秀などは「殉節三烈士」として国民的英雄だった。

清国は満州族政権の国だが、支配下にあった漢民族は日清戦争前から革命政権樹立に向けて活動していた。漢口楽善堂の綱領にも「漢民族を助けて其革命運動を助成し、以て日支（日中）提携の実現を期す。」とある。

そして、「東亜経綸として必要な人材育成として上海に学校を設立する」とあり、これが後に日清貿易研究所として実現したのだった。

さらに、長沙、重慶、北京等に（楽善堂）支部を設け、革命派志士と連絡を保持し、革命運動を促進するとした。

日清戦争後、革命政権を樹立する核となる同志を求め活動は活発化した。荒尾は台湾で病死してしまった。その事業を引き継いだのが、荒尾の盟友であり日清貿易研究所生徒舎監の宗方小太郎だった。宗方は済々黌を興した佐々友房の薫陶を受けたが、佐々も薩軍に身を投じた一人だった。いわば、西郷精神の継承者と言っても良い。佐々が平岡たちと東洋学館設立に尽力するのも自然な流れだった。宗方と協力関係にあった宮崎寅蔵（滔天）の兄八郎も薩軍に馳せ参じ、戦死している。

孫文の来日、出会い、支援

宗方小太郎は詳細な日記を遺している。その内容を追っていくと、明治三十（一八九七）年十一月二十日、滔天の実家である荒尾村（現在の熊本県荒尾市）で宗方は孫文（逸仙）と会見している。この年の九月、孫文は日本に亡命してきたというが、山中樵（中山ともいうが日記には山中とある）の変名を使つてもいた。日清戦争勃発の報にハワイで興中会を起こしたものの、以後、革命蜂起に失敗しては幾度も日本に逃げ込んできた孫文だった。そんな亡命者孫文、身辺警護者の宮崎滔天の生活支援を行なってきたのは、玄洋社の人々だった。炭鉱経営者として財を成した平岡浩太郎は孫文の亡命資金を提供し、革命蜂起のヒト、モノ、カネまで準備した。時には、本来の目的である中国の革命支援が孫文の意志でフィリッピンへの独立支援に費消されもした。いわゆる布引丸事件では、平岡の甥である内田良平（玄洋社、黒龍会主幹）と滔天とが対立し、袂を分かつ原因にもなった。

平岡が亡くなった後、その平岡の事業を引き継いだのが安川敬一郎（玄洋社、明治鉱業）だった。平岡と安川は炭鉱の共同経営者という関係でもあった。その安川が設立した明治専門学校（現在の九州工業大学）の職員宿舎には亡命中の孫文が潜んでいたとも、学生食堂で食事していたとも証言もある。この工業学校を目にして、革命成就後には自国に

設立したい学校として孫文は関心を示していたのではないだろうか。



宮崎宮の東鳥居（平岡浩太郎、安川敬一郎による奉獻）

大正二（一九一三）年三月、孫文は八幡製鉄所、明治専門学校、九州帝国大学、常盤館、玄洋社など、思い出の地を訪問した。

この時、初代玄洋社社長である平岡浩太郎の墓参を行なった。誰が、隣国を最初に助けてくれたのか。それを孫文は忘れていなかった。なんでも一番でなければ気が済まない平岡は、孫文の墓参に「魁は俺だ」と地下で胸を反らしていたのではないか。

蛇足ながら、この平岡の墓所にインドの婦人を案内する機会があった。今、あなたが立っている場所は孫文が御礼の墓参で来た際に立った場所ですよと告げると、飛び上がりながらに驚愕していた。インドが独立できたのは、孫文が革命に成功したからだという。平岡は、これを聞いて、再び胸を反らしてのではなからうか。

辛亥革命といえば孫文。その孫文の革命支援に多くの日本人が関わった。その魁としての平岡浩太郎の存在を忘れてはならないと思



平岡浩太郎墓（博多聖福寺）頭山満の撰文が刻まれている

【参考文献・資料】

- ・玄洋社社史編纂会 編、『玄洋社社史』、葦書房、平成四年
- ・井川聡、小林寛 著、『人ありて』海鳥社、二〇〇六年
- ・石瀧豊美 著、『玄洋社・封印された実像』海鳥社、二〇一〇年
- ・徳永博文 著、『日本の石炭産業遺産』弦書房、二〇一二年
- ・劉寒吉 著、『松本健次郎傳』松本健次郎傳刊行会、昭和四十三年
- ・大里浩秋 著、『宗方小太郎日記』神奈川大学人文研究所、浦辺登 著、『アジア独立と東京五輪』弦書房、二〇一三年

柳宗悦のアジア的価値観

小野 耕資

柳宗悦という人物

柳宗悦は民藝復興運動や朝鮮美術の再評価などで知られているが、一般社会におけるその思想に対する理解は表面的なものにとどまっております、深いものになっていない。本稿でも取り上げる朝鮮美術への評価も、柳の思想の全体像から位置づけるような論考はごくわずかである。ある種左翼的な人物との誤解もある。右翼左翼などという二分法はとつくに意味を失っており、そうした偏見を除いて虚心に柳の思想を眺めていこうと思う。

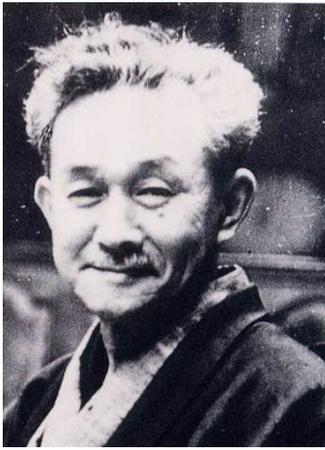
柳は明治二十二年に海軍少将柳権悦の三男として生まれた。旧制学習院高等科を経て東京帝国大学卒業。専攻はウィリアム・ブレイクやウォルト・ホイットマン等の英語圏の宗教哲学であった。柳は志賀直哉、武者小路実篤らと『白樺』の中心人物として活躍しており、西洋宗教思想に対する論文が多かったが、ある時東洋思想に開眼し、東洋文化に対する論考を発表し始めた。

旧制学習院高等科から東京帝国大学在学中に、同人雑誌グループ白樺派に参加。生活に即した民芸品に注目して「用の美」を唱え、民藝運動を起こした。

東洋文化について論じはじめたのとはほぼ同時期に、柳は朝鮮文化への関心を示すように

なった。朝鮮民画など朝鮮半島の美術文化にも深い理解を寄せ、京城において道路拡張のため李氏朝鮮時代の旧王宮である景福宮光化門が取り壊されそうになると、これに反対抗議した。

その主張は文化に関する所にとどまらず、大正八年に朝鮮半島で勃発した三・一独立運動に対する朝鮮総督府の弾圧に対し、「反抗する彼ら（朝鮮人）よりも一層愚かなのは、圧迫する我々（日本人）である」と批判した。師である鈴木大拙とも終生交流を保ち、晩年は仏教を題材にした著作を多く発表した。昭和三十六年、師である鈴木大拙より先に七十二歳でなくなっている。大拙は柳の死を受けて、「年よりも長生きして、若いものに先立たれると、又特殊の寂しさを覚える。（中略）日本は大なる東洋的「美の法門」の開拓者を失った。これは日本だけの損失でない。実に世界的なものがある」と評した（「柳君を憶う」）。



柳宗悦

民藝への関心

あまり知られていないことではあるが、柳が関心を示したのは朝鮮文化だけではなかった。柳は世界中のありとあらゆる伝統的民芸品、工芸品に関心をもち、その保存を訴えた。柳は、民芸や工芸の中に伝統が生活に息づいていた様を見たのである。「工藝の美は、傳統の美である。傳統に守られずして民衆に工藝の方向があり得たらうか。そこに見られる凡ての美は堆積せられた傳統の、驚くべき業だと云はねばならぬ。試みに一つの蟲を想へよ、その背後に、打ち續く傳統がなかつたら、あの驚嘆すべき本能があり得たらうか。其存在を支へるものは一つに傳統である。人には自由があると云ひ張るであらうか。だが私達には傳統を破壊する自由が與へられてゐるのではなく、傳統を活かす自由のみが許されてゐるのである。自由を反抗と解するのは淺な經驗に過ぎない。それが拘束に終らなかつた場合があらうか。個性よりも傳統が更に自由な奇蹟を示すのである。私達は自己より更に偉大なもののある事を信じていい。そうしてかかるものへの歸依に、始めて眞の自己を見出す事を悟らねばならぬ。工藝の美はまざまざと此事を教へてくれる」（『民藝大鑑 第一巻』）。

柳は民芸品や工芸品、そして晩年に唱えた仏教的信仰を通して近代が失つたゲマインシャフトの共同性や、神聖なるものへの敬虔

な感情を取り戻そうと論じていた。

『手仕事の日本』

柳の著書の中でわたしが最も素晴らしと思うものに、『手仕事の日本』がある。『手仕事の日本』は昭和十七年から十八年ごろに執筆されたが、戦争の激化により出版が滞り、加筆されたうえで昭和二十三年に出版された。柳は日本各地に残る民藝文化を發展させるためにこの本を書いたが、戦災と高度経済成長で柳が紹介している民藝のほとんどは博物館のみ残るものとなり、柳の意図とは異なり戦前日本の手仕事が身近にあった生活を伝える貴重な史料となっている。

柳は、『手仕事の日本』の冒頭で日本は「手仕事の国」であるとして、機械化により「働く人の悦び」や「民族的な特色」が薄まってしまったことを批判する。「氣候風土を離れて品物は生まれてこない」のであって、「どの国の人といえどもその国に生まれたという運命に、どこまでも感謝と誇りを有つことが務めではないでしょうか」と語る。風土や歴史は文化の礎であると論じ、その中に民藝を位置付けているのである。民藝は日本人が生み育てた「固有の財産」であって、祖先がわれわれに与えてくれた「伝統の力」による「遺産」であるとした。

柳が各地の民藝を紹介していく中で繰り返して論じているのは、生活に根ざした品物であること、営利主義による濫造への批判であ

る。特に営利主義については濫造による質の低下などが民藝にも入り込んでいいることを「便利さを買つて美しさを売つてしまひました」と厳しく批判している。

柳の多元的価値を重んじる思想

柳宗悦の思想には、アジア的な多元的価値観を維持しようとする願いが込められている。多元的なものは多元のまままで一元的であるという発想が非常に強い。各自は各自の文化、歴史、伝統を維持していくことで世界は發展するという価値観を強く抱いていた。それは明治国粹主義と通ずるものである。それを理解しなければ柳の朝鮮への共感はず理解できない。

柳はなぜ朝鮮文化への関心を示し、光化門の取り壊しに反対する政治的発言を行い、民藝復興運動をおこし、晩年には仏教に篤く傾倒したのか。これらすべて、近代文明や帝国主義に踏みつぶされ、忘れ去られ、時代遅れの価値のないものと見なされ、滅び去ろうとしていたものであった。その滅び去ろうとしているものの中には、現代人が忘れていいる美がある、というのが柳の主張であった。

ゲマインシャフト的社會と信仰とは密接不可分なものである。柳は「信仰の世界を只夢見る様な想像の世界だと思ふであらうか、否、信仰の世界よりも、より具像な世界を吾々は持つ事が出来ぬ」（柳宗悦「存在の宗教的意味」『柳宗悦全集』三巻）という。信仰は、死者

との対話である。死者が甦り、再び現世に影響を与えることを信じない者は、伝統を信じることができない。その残した事績や言葉に触れることで、死者は何度でも甦るのである。祖国の運命を悠久のものにする力が、伝統や信仰にはある。美とは、この伝統や信仰の結晶と言つてよい。そこには、武力や金力に負けぬ力がある。

「伝統は一人立ちができないものを助けてくれる。それは大きな安全な船にも等しい。そのお蔭で小さな人間も大きな海原を乗り切ることが出来る。伝統は個人の脆さを救ってくれる。実にこの世の多くの美しいものが美しくなる力なくして成ったことを想い起さねばならない」(『美の法門』『柳宗悦全集』十八巻)。ここまでくると伝統は「他力」に似てくる。自力救済を重んじる現代社会とは異質な発想であるが、そこに美を認めるのである。

個人の力などごく儂いものである。卑小な個が人生の荒波を超える際に、伝統は大きな助けとなる。伝統は古き良き生命の継承であつて、現状維持でも過去の繰り返しでもない。古き良き生命が、自らの人生を支えてくれていることへの自覚である。柳は、「一切の偉大なる芸術は人生を離れて存在しない」と述べたが(『宗教家としてのロダン』『柳宗悦全集』一卷)、それは芸術に限ったことではない。偉大なる事業は人生を離れて存在しない。即ち、伝統や信仰を離れて存在しない

ということである。人生は絶えず人間性の表現を追い求めている。敬虔な信仰を抜きにして、精神の深みを悟ることはできない。

「靈性」の発見

「靈性」とは魂とか精神性という言葉と近いが、特に宗教的情操を語る時にこの言葉が使われる。岡倉天心、鈴木大拙、柳宗悦を結ぶ言葉に「靈性」がある。靈性とは魂の問題である。近代文明は確かに人々を物質的に豊かにしたが、その分精神の救済を置き忘れてきた。岡倉と大拙、柳は直接的な繋がりは見当たらない。だがこの三人は「靈性」という言葉で確実に繋がっている。この三人は「靈性」を喫緊の問題と見なしたのである。鈴木大拙は岡倉の靈性に関する議論を深く参照し、発展継承している。その大拙の事業を受け継いだのが柳であつた。

柳は親鸞を「同じ罪に泣く人々の友となろうとした」と評価し、寺を持ち僧を名乗る後世の仏教者を批判している。一人の人間として罪に泣く人々に向き合い、魂に寄り添うことを求めた。非僧非俗が親鸞の教えの骨髄であるとした(『南無阿彌陀仏』)。寺に籠らず、僧という特殊な立場に自らを置かず、一人の人間として迷える人の苦しみに寄り添う精神こそ必要としたのである。

儒学においては世の人を救う経世済民を重んじ、個人が悟りを開き救済されることを教える仏教とは相容れぬ面がある。一方でわが

国よつて生み出され発達してきた仏教思想は個人が修行し悟りを開く上座部仏教ではなく、多くの迷える人を極楽浄土へと救う大乘仏教であつた。現世において人々の安楽をもたらさんとする儒学の大理想は素晴らしく、篤く共感する者であるが、一方で死の問題など現世の政治経済では如何ともしがたい問題もわれわれの日常には存在する。また、魂の問題は為政者が足を踏み入れるべき領域とも思われぬ。儒学と仏教の落としどころを見つけていくことも必要だろう。

柳は仏教に傾倒し数々の著作を残したが、仏教の教团的側面は軽視し批判の対象とした。柳が高く評価したのは、例えば妙行人のように俗世にあつて信心深い生活を送った人たちであつた。柳は妙好人の生活に信仰が結びついていく様に信仰の理想を見たのである。なお、妙好人への注目も鈴木大拙がはじめに行い、柳がそれを発展継承したのである。

柳は信仰や美に、乱れた世を清め美しくする力があると信じた。争いからは何も生まれない。人間が本来持つていく情愛によつて世を美しくできる。情愛は誰にも奪えないと考へた。伝統は自らの意志で選ぶことのできない、不可避の選択である。不可避の選択とは先人からの声にいやおうなく拘束されるということだ。伝統は人間の感性に染みついていく。卑小な欲望ではなく、感性に委ねたとき、それは先人の声に身をゆだねることである。柳の信仰や伝統文化への敬虔な態度をわれわ

れは今一度顧みる必要があるのではないか。

崎門学と大アジア主義の関係

折本龍則

先日、弊会顧問の坪内隆彦が新著『GHQが恐れた崎門学』(展転社)を上梓された。本書は、江戸時代前期の儒者・神道家である山崎闇齋が創始した崎門学を基調に、幕末志士に影響を与えた五冊として浅見綱齋の『靖献遺言』、栗林潜鋒の『保建大記』、山県大武の『柳子新論』、蒲生君平の『山陵志』、頼山の『日本外史』を取り上げ、それぞれの史的背景や根底思想について論じている。



実はこの崎門学と大アジア主義は、浅からぬ因縁を有している。若き日の頭山滿等、玄洋社の志士たちが、興志塾の高場乱から『靖献遺言』の熱血講義を受け、忠孝義胆を養ったことは知られているが、頭山が「五百年に一度の傑物」と称した荒尾精もまた陸軍士官学校時代に根津一(東亜同文書院初代院長)や花田仲之助(満州義軍を組織)等の同志と『靖献遺言』を愛読し、その節義の純正なこ

とから「靖献派」の領袖として畏敬された。荒尾は最初陸軍参謀のシナ部付として大陸に雄飛し、岸田吟香の開いた売薬店である樂善堂の支店を漢口に開いて諜報偵察に当たった。その結果、西欧の東亜侵略に対抗する為に日清が提携する必要性を痛感し、上海に後の東亜同文書院の前身となる日清貿易研究所を設立した。

漢口樂善堂の出身で、日露開戦の先立ちいち早く新疆イリ方面の探查に赴いた浦敬一は、平戸崎門派の重鎮である楠本碩水の門人である(浦に関する詳細は別稿「清国改造を志し、新疆偵察の途上で消息を絶った東亜の先覚烈士、浦敬一」参照)。この平戸崎門派については、上述した坪内氏の新著でも触れられており、なかでも碩水に師事した岡彪郎(通称、次郎)は、上述した荒尾精の日清貿易研究所に入り、日清戦争に際しては陸軍通訳官として従軍した。また宮崎滔天の兄である宮崎八郎もまた、慶応三年、碩水の下を訪れ、僅か二か月の短期間ではあったがその薫陶に浴している。大アジア主義者、宮崎滔天を見出した犬養毅の五世祖は、若林強齋の学塾である望楠軒の門人に名を連ねた犬養訥齋であり、代々崎門学は犬養家の家学として継承された。訥齋という号は、その師強齋が、彼の多弁を戒めて命名したものと亦言われる。犬養の没後、その筐底から発見された詩稿には、次のような五絶一首がある。

補世新無効。傳家有舊書。
不如田二頃。耕讀臥吾廬。

吾五世祖訥齋先生。以闇齋派經學垂帷。
爾來繼家學四世。至予斯學荒矣。

すなわち、犬養は家学の荒廢を憂い、その復興を念じているのである。彼が、明治四十三年に生起した南北朝正閏問題において、崎門派の内田周平と協力し、議論を南朝正統論に導いたのは、その思想的面目を明白に示す事績といえよう。

このように、崎門学と大アジア主義を結び付ける証拠は多いが、なかでも上述した平戸崎門派の出で大アジア主義と関係を持った人物は上述した以外にも何人か見出される。そこで以下では黒龍会編の『東亜先覚志士記伝』をもとに、それらの関係人物を列挙し、それぞれの略歴を摘記する。

岡幸七郎

明治元年七月二十一日平戸生まれ。岡彪郎(通称次郎)の弟。家は代々松浦藩士。少壮期に兄次郎と共に楠本碩水の門に学ぶ。明治二十九年大陸経綸の志を抱きシナに渡航し、上海に留まってシナ語を修め、次いでシナ中部の各省を旅行踏査し、同地の地理人情風俗に精通する。後に漢口に居を構え、日露戦争に際しては陸軍通訳官として従軍した。戦後、漢口で『漢口日報』を発刊し、社長として健筆を振るう。漢口に留すること三十年、その

間、日本居留民会長を十数年務めた。昭和二年、健康を害して一時帰国の際、郷里の平戸で長逝した。

沖楨介

明治六年、平戸の出身。十三の時、長崎中学校に入り、次いで熊本済々黌に転校し、さらに熊本第五高等学校に入学したが、中退して明治二十六年上京し、病を得て帰郷、静養の傍ら楠本碩水の門に入る。その後二十六年再び上京して当時の東京専門学校(早稲田大学)に入学するも神経痛を患い退学、病癒えて後は、内田良平と親近して黒龍会に出入りした。三十三年、慨然としてシナ渡航の志を起し、三十四年には北京に赴いて東文学社(日本語学校)の教師となった。折しも日露の風雲急を告げ、北京公使館付武官が対露特別任務班組織のため決死の志士を募るとこれに応じ、三十七年二月に戦端が開かれて間もなく横川省三等と北滿に潜入したが、ロシア兵に捕らえられてハルピン郊外で銃殺刑に処された。享年三十一。



沖楨介

楠本正徹

明治八年平戸出身。楠本端山・碩水兄弟の甥に当たり、幼少にして端山・碩水に学んだ。軍人を志し、十四の時上京、杉浦重剛の門に入る。しかし近眼の爲軍人の道を諦めてからは報国の志を抱いてロシア語とシナ語を学び、日清戦争の際には軍属として威海衛の攻略に武勇を発揮した。三国干渉以降、ロシアへの痛憤止まず、二十九年内田良平と共にウラジオストクに渡航して極東情勢の調査に努めた。さらに、露清韓三国国境地帯の実情を調査するため、二十九年十月単身ウラジオストクを発し、嚴寒を犯して間島地方の地理情勢を調査した後ウラジオストクに帰還するも、凍傷が悪化し、内田等の懇篤な看病にもかかわらず客死した。享年二十三。

菅沼貞風

慶応元年、平戸の出身。十五歳で楠本端山に入門して学に励み、藩主松浦侯の世子の侍伴となる。さらに十八の時に碩水の門に学び、東京に遊学して東京帝国大学古典科講習科漢書部に入學、主として内藤湖南の教えを受ける傍ら『大日本商業史』を編述した。これが評価されて二十一年古典科を卒業後東京高等商業学校の教師に就任した。さらに大学卒業に先立って『新日本凶南の夢』と題する冊子を著し我が国による北守南進の東亜経綸策を説いた。『東亜先覚志士記伝』いわくそ

の精神は「スペインと戦いルソン（フィリピン）を独立せしめ東洋の元気を振作し、南洋諸島を連ねて一団となし、攻守の同盟を締結し、シナがルソンに寇せば我が国はその首を制し、シナが我が国に寇せばルソンがその尾を撃つ」の計を決し、以てシナをして我が国の侮るべからざるを知らしめなば、東亜連合の策は茲に成り、東洋の元気を振作し得るであろう」というものであった。この凶南の策を實行せんと試みた彼は、教職を辞し、福本日南と謀つて二十二年四月、横浜を發して南洋の実情調査に赴いた。そして同月にはマニラに到着し鋭意実地調査に努めたが七月に至つてコレラを發病し容態急變して不歸の客となつた。享年二十五。



菅沼貞風

大体以上であるが、ではなぜ崎門派はアジアを目指したのかという点が問題になる。前述した荒尾精は、『宇内統一論』を著し、「天成自然の真君」たる天皇を戴く我が国の世界的な天命を説き、いわば皇道恢弘としての興亜思想を唱えた（詳細は別稿「興亜の先達、荒尾精の『宇内統一論』を読む」参照）。この他に、特筆すべきもう一人の人物は明治の

民権家である杉田定一である。彼は嘉永四年越前福井藩の出身であり、新聞記者から民権家に転じて板垣退助と共に「愛国社」を再興した。さらに明治十七年、清仏戦争が起ると東亜前途を憂い、単身上海に渡航して、同志の中江兆民や植木枝盛等と共に「東洋学館」を設立した。杉田は頭山や寺尾亨に次ぐシナ革命の同情者とされる。そんな杉田が思想的影響を最も受けたのは、勤王僧の道雅上人と福井の藩儒である吉田東篁であり、なかでも吉田は橋本左内の師として崎門学を伝授した人物として知られる。杉田は両師を回顧して次のように述べている。「吉田東篁先生は、道雅上人の慷慨気節を尊ばれたのと違い、至極温厚篤実の人であった。それで道雅上人からは尊皇攘夷の思想を学び、東篁先生からは忠君愛国の大義を学んだ。この二者の教訓は自分の一生を支配するものとなって、後年板垣伯と共に、大いに民権の拡張を謀つたのも、皇権を尊ぶと共に民権を重んずる、明治大帝の五事の御誓文に基づいて、自由民権論を高唱したのであった。抑々君主の大御心は、常に『民安かれ』と願わせらるる御心であると信ずるので、内においては、藩閥政治に反対し、外においては、東洋の自由を主張したのである。欧米に向つて反抗したのも、彼が東方に向つて圧制を試みるからであつて、我れより欧米を圧制するようであつてはいかぬ。そこで日本は終始一貫して王道の大精神に則らねばならぬと、深く確信した。

『日本書紀』の天智六（六六七）年十一月の件には、「筑紫都督府」といふ謎の記述が、百済の「熊津都督府」と並列される形で登場してゐる。後年の大宰府の前身にあたる施設の様だが、「都督府」といへば、唐が羈縻体制下にあつて、被支配国に敷いた軍事施設である。半島においても、同盟を結んだ新羅には鶏林都督府、百済滅亡後、熊津都督府、高句麗滅亡後には安東都督府などが敷かれてゐる。その点について、中村修也氏は「天智朝と東アジア」（NHK出版、二〇一五）の中で、「…百済や高句麗の敗戦後の状況を考へれば、日本にも都督府が置かれる状況はじゅうぶんにあつたと解するべきではなからうか」と提起している。七世紀に唐に敗れた百済や高句麗同様、白村江敗戦後の日本に「筑紫都督府」が敷かれたであらうと考へるわけである。そこには、「…大国と戦つて敗戦すれば、占領支配を受けるといつた戦争の法則から外れることはない」といつた「戦争の常識」が前提とされてゐる。確かに我々の知る第二次世界大戦時の日本の敗戦時と照らし合せれば、「日本は敗戦したが、唐の占領は受けない、唐と友好関係を保ち、唐の律令を導入して国力の充実をはかった」といふ論理には不自然さが残るのは否めない。さうした「定

「筑紫都督府」と大宰府の成立

山本 直人

説”に対して疑問が生じるのも、至極当然だといへよう。

しかしながら、そもそもさうした事実があるならば、大陸側の正史である『旧唐書』『新唐書』、半島の『三国史記』に、それに該当する記述が一切ないのはどういふわけか。新羅や百済、高句麗にせよ、都督府が敷かれたのであれば、必ずそれに該当する記述が書き込まれてゐる。まして戦勝国側の唐や新羅が、「倭国への支配」といふ「事実」を隠蔽する理由などあるまい。

書紀の「筑紫都督府」については、岩波文庫の『日本書紀』の補注においても、「原史料にあつた修飾がそのまま残つたもの」としてをり、依然として謎である。もちろん国内外の正史から漏れた可能性もあらう。それでも正史以外の伝承や木簡などの断片的な史料などに、何らかの痕跡が伝へられて然るべきだらう。

例へば押部佳周氏は『日本律令成立の研究』（塙書房、昭五八）の中で、「これは鎮將の要求を入れ、部分的であらうが都督府制の導入を名目上容認したことを示すものであらう」と推測してゐる。百歩譲つて「筑紫都督府」が「事実」だとしても、唐が支配したのは筑紫周辺のみなのか、それとも近畿にまで及んだのか。仮に日本を「占領下」においたとするなら、唐はいつ撤退したのか。滅亡させた百済や高句麗に対してさへも、唐はしばしば復興軍の反乱に悩まされてゐる。その後新羅

との対立が鮮明になると、唐は各都督府を移動、もしくは撤退させてゐるのだ。もし日本に対して都督府が敷かれたのであれば、戦勝国が被占領地からの反乱でもない限り、さう易々と撤退することなど、ありえないはずである。

「筑紫都督府」の用例は天智六年条の一例のみであり、その後律令制下の大宰府成立まで、後にも先にもない。倉住靖彦氏の『大宰府』（教育社新書、昭五四）では、「都督府は大宰府の唐名として用いられるが、本来的な意味は軍政府であり、史料的にはこれが唯一の用例である。当時の緊迫した状況が筑紫大宰に重大な影響を与え、駐在地の移転とともに、機構的にも整備が進められたであろうことは十分に考えられる」と推察してゐる。古代からの我が国における外交姿勢を辿つた『善隣国宝記』に拠ると、天智天皇三年四月に、唐使・郭務儂が対馬に到着した際、伊吉博徳が「日本鎮西筑紫大將軍」の牒を渡して、入京を拒否したといふ『海外国記』の記録が引用されてゐる。そこから倉住氏は、都督府と「大將軍」との関連に着目し、「後に『書紀』編纂にさいして、同条にもみえる熊津都督府に模して筑紫都督府という名称を創出したのではないだろうか」と説明してゐる。必ずしも明確な解答にはならないかもしれないが、筑紫大宰がその後の律令制度における大宰府成立の前身と考へれば、最も穏当な解釈といへるだらう。

以上の点から「筑紫都督府」について、以下の様な私見を提示するに留めておきたい。わが国の律令国家における大宰府の歴史は、推古朝の時代から我が国の外の玄関口の役割を果たしてきたと推定される「筑紫大宰」の時代に遡る。ところがその筑紫大宰が、百済救援の役に境に軍事的側面を強めることになつた。その結果、当時の外交担当者が、筑紫大宰の軍事施設化に伴ひ、対外的に呼称するのにあたり、半島の各地に設立された「都督府」に該当する施設と解釈し、臨時的に記述して残されたのが、この「筑紫都督府」だつたのではないだろうか。これが現時点での筆者の見解であるが、もちろんこれも憶測の域を出ないものである。唐による倭国支配を示す史料がなく、尚かつその後「都督府」が大宰府の漢名として菅公の時代まで並称され続けた、といふ実状を鑑みれば、いづれにせよ「筑紫都督府」は、飽くまで筑紫大宰から大宰府設立までに使用された一時的な呼称に過ぎまい。

何よりも六六八年の高句麗滅亡まで、倭国と高句麗との交流、もしくは両国の同盟関係が継続されてゐた事実をどう見るべきか。『旧唐書』「劉仁軌伝」に、天智天皇四（六六五）年八月、百済の熊津で、劉仁願のもと、旧百済王子の扶余隆と新羅の文武王とが和親のための会盟儀式を行はれた。その際、劉仁軌の上表文に「陛下もし高麗を殲滅せんと欲せば、百済の土地を棄つべからず…倭人遠しと

雖も、また相影響す」と綴られてゐる。唐が百済を滅ぼしながらも、百済と倭との関係に對して、依然として警戒を解いてゐない状況が察せられる。

唐が倭国に羈縻体制を敷いたのであれば、唐にとつて依然として敵対国であつた高句麗との外交を許すはずなどあるまい。白村江敗戦後、少なくとも二回にわたる高句麗からの使者は、書紀編纂者による粉飾とでもいふのであらうか。だとすれば、東国各地にある高麗郡などの集落をどう説明するのか。

そもそも「敗戦＝占領」ではない。第二次世界大戦での日米間の戦争においても、周知の通り、我が国は昭和十八年のミッドウェイ海戦以来、ソ連参戦に至るまで敗北を喫してきた。しかし、ミッドウェイで敗北してから、即時に米国による日本支配が始まつたわけではない。その後のガダルカナル撤退、ラバウル戦、絶対国防圏の最前線にあたるサイパン侵攻以降は、本土空襲、そして沖縄上陸、広島・長崎への原爆投下…と、米軍は日本軍の抗戦に遭ひながらも、段階を踏んでから本土上陸を果たしてゐる。そして数々の終戦工作をたどつてから、漸くGHQによる占領政策を実施してゐるのである。

七世紀の東アジアにおいても、唐は百済や高句麗に對して、何度も攻撃を加へながらも、その都度抵抗に遭ひ、現地での徹底攻略を果たしてから、漸く羈縻支配に至つてゐる。まして倭国本土から遠く離れた異国の地での軍

事的敗北である。しかもそれは、飽くまで百済といふ同盟国への後方支援といふ形をとつたまでである。海戦で唐と倭国が直接対峙したことはあつても、それも実質的には、百済対新羅の代理戦争だつたに過ぎない。いはば第二次世界大戦後の冷戦下における朝鮮戦争、ベトナム戦争が、事実上米国とソ連との代理戦争であつたとすれば、唐と日本との戦は、さうしたイデオロギーすら介在しないものであつた。

確かに倭国は、唐との直接対決によつて海戦での大敗を喫した。しかし失つたのは、飽くまでそれまでの半島経営における権益や優越的地位であつて、本土そのものが攻撃の被害に見舞はれたわけではない。もちろんそれでも、これまで大陸から朝貢関係からは距離を保ち、新羅・百済において優越的な地位にあつた倭国にとつて、白村江での敗戦は大きな損失であつたことは変りあるまい。

以上、この問題についてこれ以上立ち入るのは控へるが、今後「唐による倭国への羈縻支配」を「事実」認定されるまでには、国内外の複数の史料、考古学的成果の発掘などが必要条件である。しかしながら、今のところその可能性はゼロに等しいといつてよい。

例へば百済の最後の王都だつた、韓国の扶余の定林寺の石塔の第一層には、「大唐平百济国碑銘」と刻まれた碑文が残されてゐる。百済滅亡当時の唐軍が戦勝記念に刻んだものだが、同様の仕打ちを倭国に施さなかつたの

は何故か。唐が倭国に羈摩支配したのであれば、「大唐平倭国碑銘」の様に、何らかの物証が遺されて然るべきではないか。それとも壬申の乱の戦禍で破壊されたとしてもいふのでらうか。

比較文学、比較文化、比較思想……といった具合に、異なる対象を複数並べて比較検証しようとする場合、類似点だけ並列させて分析するのは適切ではない。両者に類似点があるとするならば、全く同一の内容でもない限り、譬へ小異であつても必ず相違点を見出す手続きが不可欠である。況して千三百年以上もの年月の離れた古代史と現代史である。現代の戦争の論理を以てして、遙かに時空の推移した古代を裁断する弊は慎まなければならない。

高句麗滅亡後、半島統一を果たし、三韓一の弱小国から強大国となつた新羅と、当時最大の大帝國でもあつた唐とは、激しく対立する様になつた。さうした中、白村江以降の我が国は、戦鬪での敗北後にも関らず、唐とも新羅とも双方、対等な関係を結ぶことになる。むしろ倭国は、その後、隣国との外交そのものにも距離を置き始めた、といつた方が実情に即してゐるかもしれない。さういつた世界情勢もあつてか、我が国は白村江敗戦後も、比較的安定した立ち位置を確保することができたのである。

天智天皇の近江朝時代の約五年間は、確かに昭和の敗戦後の米国による占領下七年に匹

敵する、極めて緊迫した期間にあたるかもしれない。そして、あまりにも目まぐるしく変化する国際情勢とともに、外圧との葛藤、急速度による新文明の移入に明け暮れた時期でもある。さうした中、他国からの直接支配を受けることがなかつた当時の我が国の奮闘は、各国の思惑や東アジアにおける日本の地勢の距離など、様々な偶然が作用した結果とはいへ、もつと見直されてよいはずである。



筑紫大宰府跡

西洋近代思想への抵抗

坪内 隆彦

アジア諸国は、西洋列強による植民地化の過程で伝統文化を無残に破壊された。劣等感を植え付けられたアジア諸民族は、独自の文化への誇りを失い、人間中心主義、物質至上主義といった西洋近代の価値観を受容していった。こうして、自らの伝統文化、宗教の中の普遍性は忘却させられたのである。

西洋近代文明と対峙し、東洋文明を称揚した先覚者の一人が岡倉天心である。彼は一九〇六年に英文で著した『茶の本』において、次のように喝破した。

「もしもわが国が文明国となるために、身の毛のよだつ戦争の栄光に拠らなければならぬとしたら、われわれは喜んで野蛮人であろう。われわれの技芸と理想にふさわしい尊敬がはらわれる時まで喜んで待とう」（桶谷秀昭訳）

天心が交流したインドの詩聖タゴールもまた、天心と文明観を共有し、西洋近代の超克を模索した。

一方、列強に蹂躪されたアジア各地の志士たちは、植民地解放闘争を展開していた。その過程で再発見された伝統文化、宗教は、西洋近代文明を超克し得る文明的な意味を持っていた。

例えば、マハトマ・ガンジーは、「近代文明に対する厳しい弾劾の書」と評される『ヒ

ンドゥー・スワラージ』（一九一〇年）において、「私たちの祖先は、機械のつくりかたを知らなかったわけではない。ただそんなものを欲したら徳性を失うだろうということも知っていた。だから熟考したうえで、できる限りのことを、手と足で行うべきであると決めた」と書いている。

パキスタンのムハンマド・イクバルは、独自のイスラーム思想に基づいて、鋭い近代批判を展開した。セイロンのアナガリーカ・ダルマパーラは、「今世紀は一転して眠れる亜細亜を覚醒せざるべからず。而して欧州一流の文明よりも更に完全なる世界的文明を作らざるべからず」と語っていた。インドのビハリ・ボースは、西洋近代の物質偏重を是正し、東洋の伝統思想の復興による文明転換を目指していた。ベトナムのクオン・デもまた、近代主義に批判的なカオダイ教との連携を模索した。

普遍的価値に基づいたアジア文明の復興というビジョンは、多くの場合、それぞれの民族思想とともに、宗教思想に裏付けられているのである。

独立の維持を果たしたという点において、明治以来の近代化に一定の評価を与えつつも、文明転換の視点を失わなかつた日本の興亜陣営とアジアの志士たちは、文明史的課題をも共有していたのである。

やがて、大東亜共栄圏構想が盛んに語られるに至って、西洋近代に対する批判論も、あ

る種の総括のときを迎える。戦時期に展開さ

れた「近代の超克」論がそれだ。昭和十七（一九四二）年七月には、小林秀雄、西谷啓治、亀井勝一郎、諸井三郎、林房雄、鈴木成高、三好達治、菊池正士、津村秀夫、下村寅太郎、中村光夫、吉満義彦、河上徹太郎らが参加して「近代の超克」の座談会が開かれた。これらの参加者は、京都学派の哲学者、日本浪漫派の文学者、『文学界』同人の三ケループからなる。京都学派の高坂正顕、高山岩男、鈴木成高、西谷啓治は、ほぼ同時期の『中央公論』においても、座談会「世界的立場と日本」を行っている。

ただし、列強の勢力に抗して、独立維持のために富国強兵を急いだ明治以降において、西洋近代に背を向けることは困難であった。だからこそ、竹内好は『近代の超克』は、いわば日本近代史のアポリア（難関）の凝縮であった。復古と維新、尊王と攘夷、鎖国と開国、国粹と文明開化、東洋と西洋という伝統の基本軸における対抗関係が、……一挙に問題として爆発したのが「近代の超克」論議であった」と指摘したのである。

一方、昭和十八年十一月五日、六日の両日、東京で大東亜会議が開催された。東條英機総理、中華民国（南京）国民政府の汪兆銘行政院長、満州国の張景恵総理、フィリピンのホセ・ラウレル大統領、ビルマのバー・モウ総理、タイのワンウィタヤーコーン親王、オプザーバーとして自由インド仮政府首班のチャ

ンドラ・ボースが参加した。

各国代表の言葉には、単に植民地解放と人種平等を訴えるだけではなく、当時の世界秩序を律していた西洋近代の価値観自体に対する批判が込められていたのである。帝国主義、植民地主義、人種差別をもたらした西洋近代の価値観に代わるアジア的価値観の表明である。

確かに、明治以来の日本政府の政策を振り返れば、列強に配慮するあまり、植民地支配からの解放を目指すアジアの志士に背を向けた時期があったこと、外交政策に列強の模倣と受け取られかねない側面があったこと、そして大東亜戦争において軍の一部にわが国が唱える理想に矛盾するような行動が見られたことといった問題があった。

しかし、大東亜会議において語られた各国代表の言葉には、西洋近代文明の在り方を批判し、より健全な人類文明を創造していこうという志が確かに表現されていたのである。

東條首相は、「大東亜における共存共栄の秩序は、大東亜固有の道義的精神に基づくべきものであります」、「大東亜の精神文化は最も崇高、幽玄なるものであります、今後愈々これを長養醇化して広く世界に及ぼすことは、物質文明の行き詰まりを打開し、人類全般の福祉に寄与すること渺からざるものありと信ずるのであります」と語った。

ホセ・ラウレルはこの東條の言葉を受けて「東洋は人類文明の揺籃であり、西洋に対し

その宗教と文化とを与えた」と語り、ワンウィタヤーコーンは「アジア大陸は人類発展の源である」と言いきった。

東條は、「自己の繁栄の為には不正、欺瞞、搾取をも敢えて辞せざる米英」と表現し、汪兆銘は大東亜共同宣言が「欧米の功利主義の見解を一掃した」と語り、欧米の政策の背後にある価値観を批判した。

つまり、大東亜会議は、西洋近代の物質至上主義、効率万能主義を批判した岡倉天心の有名な一句「アジアは一つ」の内実が示された瞬間でもあったのではなからうか。

地球環境問題の深刻化、精神的な価値の喪失感が進む中で、いよいよ西洋近代の超克は大きな課題として、人類全体に突きつけられているといっても良い。いまこそ、近代の超克を模索したアジアの先人たちに学び直す必要があるのではないか。

時論
外国人労働者問題から見る
目指すべき大道の覚醒
小野耕資

ある外国人技能実習性の過労死

平成二十六年四月、フィリピン人男性ジョーイ・トクナンさんが、所属する岐阜県の製造会社の従業員寮で心疾患のため亡くなった。二十七歳であった。帰国まで残り三か月のことだったという。一か月に七十八〜百二十二時間半の時間外労働をしていたとき

れ、今年（平成二十八年）八月、労災認定された。技能実習生の長時間労働による過労死認定は今までなく、異例のことだという。トクナンさんは稼いだ賃金をほとんどフィリピン本国に送金しており、フィリピンにいる娘とテレビ電話で会話することを楽しみにしていたという。

外国人技能実習制度は、企業等で働きながら専門的な技術や知識を習得するための制度で、主に発展途上国の外国人を受け入れている。表向きは、発展途上国への技能移転が目的となつているが、実際には低賃金の外国人労働者を雇用するための制度と考えるとよい。また、トクナンさんが稼いだお金を本国に送金していたことから伺える通り、外国人の側にとつても出稼ぎの手段と化している。

外国人技能実習制度の問題点は、一部事業者が残業代未払いや過重労働、あるいは従事しても技術が身につかない単純作業の3K労働などを課していることである。安倍内閣は外国人技能実習生の拡大を進めている他、財界の要望を受け実習期間を三年間から五年間に延長しようとしている。

「外国人留学生」という低賃金労働者

外国人技能実習制度と並んで外国人による低賃金労働の温床となつているのが、外国人留学生である。各大学とも、少子化による学生不足から、外国人留学生の受け入れに熱心である。政府もまた、外国人留学生の誘致に

執着している。安倍内閣は、二〇二〇年までに留学生を「三十万人」誘致することを「成長戦略」として掲げている。だがなぜ、留学生の誘致が「成長戦略」なのだろうか。政府にはそれなりの綺麗ごとめいた屁理屈もあるが、要は留学生が実質的に低賃金労働者となっているからではないか。

どういった流れで外国人留学生は日本にやってくるのだろうか。まずは現地ブローカーが広告を出す。緑あふれるキャンパスで学生生活を送りつつ、月二十〜三十万円稼ぐことができる、という内容だ。それに現地の若者が応募してくるわけである。だが、日本へ行くとなると、何かと費用がかかる。若者はそれを借金に頼る。つまり多額の借金を抱えて日本に来るわけである。そして肝心の日本にやってくるまで学生生活を送っていたとしても、日本語がそれほど流暢でない彼らに「月二十〜三十万円」の仕事などあるわけがない。結局彼らは借金だけ抱えて超低賃金労働に就くことになるのである。借金があるから、辞めて本国に帰るわけにもいかず、搾取され続けるのだ。

もちろんこう言った事例ばかりではないかもしれない。だが、留意しておくべきことは、親の力で外国に来られるような富裕層は、もはや日本には来ないということである。途上国にとって日本は魅力ある市場ではなくなりつつある。したがって先ほど紹介したような詐欺まがいの手法で外国人を連れてくるわ

けだが、果たしてそのようなことをして彼らが日本に好感情を持つだろうか。彼らがこの構造に気づいたとき、日本人を恨み、「反日」化して日本から去っていく者も少なくないという。

現在の日本経済は外国人労働者が担っている、超低賃金で3Kの労働力なしには回っていかない状態になっている。もはや現代日本の生活は彼ら超低賃金外国人労働者の存在なしには成り立たない。だがその代償は、思うより大きいのではないだろうか。

超低賃金労働者が日本人に与える影響

今まで外国人労働者の実態について見てきた。日本にも他国と同様、多数の外国人が「移民」として流入している。しかし政府は公式には移民政策をとっていない。彼らは「留学生」や「研修生」という名目で日本に入ってきている。これが非人道的な低賃金労働の温床となっている。ブローカーによっては大企業の「注文」に合うように軍隊教育まがいの「指導」を労働者に施してから日本に送り込む例もあるという。

ときおり新自由主義的な政治家などが「日本人の若者はハングリー精神を失った」「外人の方が優秀だ」といい若者バッシングを繰り返した揚句「若者を甘やかすな」とか「移民の積極化」などといったことを叫んだりする。しかしその背後には詐欺まがいの手法により多額の借金を背負わされたり、軍隊式の

教育を受けさせられたりしている外国人労働者の実情がある。人身売買、奴隷貿易も同然なのだ。奴隷売買のようなことが現に行われていて、それらをダシに甘い汁を吸うものがあることは確かだ。奴隷貿易と化した低賃金労働者は本人の希望とは無関係に使い捨てられている。長期的には外国人に対して行われているような劣悪な待遇が日本の下層民に対しても当たり前のように行われる日がやってくるだろう。外国人労働者の酷使は一般の日本人にも決して無縁な話ではなく、彼らが超低賃金労働で働かされていることは日本人労働者の賃金の下降圧力や、過重労働を課される遠因にもなっている。外国人労働者が低賃金で仕事をしてしまえば、コスト削減競争が日本人労働者にまで波及するからだ。

そしてこれらの事態を発生させるべく政府に要望し続けている存在こそが、経団連をはじめとする財界である。彼らは人の人生を馬鹿にしているとしか思えない。人間は経済成長のために翻弄されるだけの存在ではない。

外国でも低賃金労働者を量産するグローバル資本

もちろんこのように労働者を非人道的に追い詰めるのは、何も日本でだけ起こっているわけではなく、世界各地で起こっている出来事である。

例えばかつて最貧国とも言われたバングラデシュでは、現在繊維産業が盛んで、バン

グラデシュで生産された衣類は「ファストファッション」として世界中で人気となっている。

だがその陰では、国際資本が現地民を低賃金で使い捨てる縫製工場を乱立させて、現地民はそこで一日十二時間以上働き、休みも月に一、二回しかない状況に置かれているという。また、工場からの汚染水などによる深刻な健康被害、川や海などの汚染による漁業被害が起こっているという。こうした代償を払いながらも、肥太るのは巨大資本ばかりである。現地民を搾取している巨大資本には、もちろんわが国の資本も含まれていることは忘れてはならない。

こうしたことは今に始まったことではない。だが、発展途上国民の側も少しずつ経済成長してきたことで、こうした状況に甘んじる理由を持たなくなってきた。一説には欧米で繰り返されるテロ行為はこうした低賃金労働による「恨み」が大きな影響を与えているとも言われるだけに、この問題は看過できるものではない。

日本の「企業努力」が移民の増加と国際的階級格差を促進し、アメリカに代表される巨大資本の一人勝ち体制とともに国境概念は薄れ、人々は不安、社会秩序の乱れ、混乱の中で日々生活していくことになる。これを未然に防がねばならない。

資本主義が招く故郷喪失

冷戦崩壊以降、われわれは資本主義がもたらす秩序を当然のように受け入れつつある。だが、資本主義がもたらす経済的繁栄が、人々の心の安寧をもたらしただろうか。経済的繁栄によって、人間が頹廢した面はなかっただろうか。人々は国民でもなければ民族の一員でもなく、共同体も解体され、ただ市場がもたらす商品を楽しむ消費者としてしか存在を許されない。その生活は確かに便利にはなった。しかしこの生活は法や人道を公然と無視する労働環境によってまかり通っているのであって、われわれは今の「豊かな」生活なるものを根本的に疑ってかかるべきではないだろうか。

故郷の喪失は世界大で見ても民族主義の喪失なのである。地球規模の画一化が巨大資本の手によって異常なまでに進んでいる今日、民族主義は危機に瀕している。自分の企業の都合で外国人や日本人の貧困層の人生を振り回す連中は国賊と言ってよい。日本に限らず、各国の「極右」団体は移民の排斥を主張しているのもそのためである。特に欧州では、その排斥された移民が、原理主義と結びつきテロ行為に走るといふ哀しい現実もある。コスモポリタンもどきが多いこの日本国では、そういうことに鈍感で、安穩としているのである。

もちろん、移民の排斥はこうした事態の解決策に全くなっていないことを併せて指摘しておかなければならない。真に糾弾されるべき

きは人々の生まれ育った文化を破壊し、ヒトモノカネを自由に動かすことで人々を搾取り、うまみを得ている巨大資本の方である。今、世界各地でホームグロウンによるテロ行為が発生しているが、グローバリズム、資本主義がホームグロウンによるテロをもたらした根本原因であることを認めることが必要である。移民の子孫が自国社会に適応できず疎外され、低賃金労働につかざるを得なくなっている。移民一世では本国よりは生活状態が良くなることや、本国への仕送りの使命感から労働に甘んじることができるとも思えないが、二世以降はそうではない。言葉もセミリソングル化し高度な事象を理解することは難しく、将来の展望もない彼らが過激思想に染まることも不思議とすべきではない。もちろん外国人が即テロリスト予備軍であるかのような偏見は慎むべきだが、それは問題の根本原因をおおい隠すことになってはならない。

資本主義の発達はグローバリズムをもたらしたが、このグローバリズムは人々を故郷喪失の憂き目にあわせた。それは移民により故郷から引きはがされた人々を指すのはもちろん、資本主義的開発で故郷が様変わりし、すっかり民族の風景を破壊されてしまったことをも示す。祖国の共同体が機能しなくなってきたことが、資本主義即ちグローバリズムをもたらした負の側面である。ホームグロウンの問題はその極端な事例として注目されるべき

であろう。移民も二世、三世と定着してしまえば、低賃金労働を生まれながらに押し付けられなければならない理由を持たない。その不満にテロ組織が忍び寄り、心の隙間を利用するのだ。大事なものはその「心の隙間」をもたらしている資本主義、グローバリズムに対する疑念を持つことである。

グローバル化で最も悪趣味だと思ふのが、次はここが発展する式のフロンティア探しだ。支那やロシア、ブラジル、インド、南アフリカ、ベトナム、インドネシア、ミャンマー、トルコ、バングラデシュなど様々な国が挙げられている。これらすべてがそうだとはいわれないが、概して貧富の格差が甚だしく、治安も悪く、人々が貧困にあえぎ、政治にも問題を抱えている場合が多い。そんな国に乗り込んで、一部の金持ちや政府関係者、軍関係者とするんで商売を始めて大儲けして喜んでいゝ。資本主義の下劣さを余すところなく示しているといつてよい。なるほどこの下劣な集団により雇用が生まれ、最貧の住民にも生活のすがが生まれたこともあるだろう。だがそういうって経済成長してしまつて賃金が上がつて旨みがなくなつたらどうするのか。次なるフロンティアを求めて一斉に手を引いてしまふ。外資に依存した雇用はなくなり、再び貧困にあえぐことになる。そうして人々が充分飢え死にしたら、新たな「フロンティア」として「再認識」されるのだろうか。あまりに

も下種な連中という他ない。しかし日本もこうした下劣な「グローバル化」の恩恵を受けてしまつている当事者なのだ。

グローバリズムを打破する興亜論

歴史を近く見たときのグローバルズム、長く見たときの近代的価値観、そういったものを根源的に見直さなくてはならない。各国がそれぞれ培った伝統文化に回帰することが、それへの強力なアンチテーゼになるとわたしは考えている。そしてそれを主張した人達こそ、戦前の興亜論者たちであった。

興亜論は確かに列強の植民地政策に対する反発と言う側面もあった。しかし彼らはそこからさらに一步哲学的に踏み込んで、西洋近代の価値観の根本的な見直しにまで言及していた。本紙『大亜細亜』の創刊の辞でも、「メック力巡礼を二度敢行した興亜論者田中逸平は、「大亜細亜」の「大」とは領土の大きさではなく、道の尊大さを以て言うとし、大亜細亜主義の主眼は、単なる亜細亜諸国の政治的外交的軍事的連帯ではなく、大道を求め、亜細亜諸民族が培った古道（伝統的思想）の覚醒にあると喝破した。大道への自覚と研鑽、伝統の回復こそが大亜細亜の志なのである。國體の理想に基づき国内維新を達成し、亜細亜と道義を共有していくことが、我々が目指す道命」にはかならうか。それが「八紘為宇の使命」にほかならない。」と謳われている。

田中逸平は明治十五年生まれで、日本人イ

スラム教徒の草分け的存在である。田中が『白雲遊記』を著すのと同時期には満川亀太郎が『奪はれたる亜細亜』を、大川周明が『復興亜細亜の諸問題』を上梓する時期に当たる。この三者に共通することは大アジア主義を主張しただけでない。それまでのアジア主義は日本支那印度の關係にとどまっていたが、彼らはそれに加えイスラム圏を「アジア」の問題として捉えたのである。

田中は興亜をアジア諸国の政治的・外交的・軍事的連帯に求めない。はたまた白人に対する人種の闘争にも求めない。大道を求め、それぞれの文化で培った伝統的思想の覚醒に努めるべきだと唱え、日本においては「神ながらの道」がそれにあたるという。田中はイスラムにもその「古道」が流れているのを感じ取ったのである。

伝統的信仰を取り戻し、侵略者を追い払うことを通じて、立国の精神を共有することが興亜論者の志であった。現代においては、敵は帝国主義勢力ではなく、グローバル資本である。グローバル資本のヒトモノカネを自由化させ文化的破壊をもたらそうとする事態への反発を通じて、各国が立国の精神、大道に到達することこそが真の目指すべき道ではないだろうか。

わたしが理想とするのは、各民族が自らの伝統、文化、民族の誇りを保持しつつ互いに共生し、切磋琢磨することである。そのためには世界を画一化させる思想に反発し、世界

各国をそれぞれの土着文化に回帰させなければならぬ。移民政策はその土着文化をかき混ぜて破壊させる行為である。土着文化こそ人間の魂、生命である。土着文化は一身を超えて、歴史的にわれわれの過去・現在・未来をつなぐ一本の流れである。それへの敬意が必須なのである。

おわりに

わたしの個人的見解だが、例えばかつて民主党政権時に持ち上がった「東アジア共同体」構想のようなアジア各国との単純な政治経済的連帯、EUの東アジア版を作るような構想は目指すべき道ではない。そこに「国際資本の規制」、「地産地消」と「各国の伝統への回帰」がなければならぬ。各国の連帯は、「タックスヘイブン（租税回避地）」ならぬ「グローバルキャピタルヘイブン（グローバル資本回遊地）」を作るためにこそ必要なのだ。

そのためにもまず大アジア主義発祥の地日本で、維新が成されなければならない。維新とは単に政府転覆を意味するのではなく、しつこく述べるように、「国際資本の規制」と「伝統回帰」への国民の自覚と覚醒が目指されなくてはならないのである。単に政策の問題ではなく、「自覚と覚醒」が必要だということろが重要な要素なのだ。

ヒトモノカネが自由に行きかうグローバルバリエムがゆがみを見せる中で、全く新しい共生の理論が求められているように思う。

史料・東洋学館趣旨書

東洋学館設立の直接的経緯としては、明治十七（一八八四）年八月の清仏戦争勃発という緊迫した東アジア情勢を挙げることができ。ただ、東洋学館の構想は、民権派を中心に明治十五年の壬午事変後から温められていたものである。その中心となったのは、熊本の宗像政、日下部正一、鹿児島長谷場純孝、和泉邦彦ら九州改進黨の人々だった。九州改進黨は、熊本の実学党の流れをくむ公議政を核として、全九州の民権派に呼びかけて明治十五（一八八二）年三月に結成された組織である。

また、『熊本新聞』（明治十七年九月十六日）によると、杉田定一、小林樟雄、植木枝盛らも参画していたことがわかる。ここで注目したいのは、崎門学を思想的基盤とした杉田が民権派として活動していた点である。杉田は、嘉永四（一八五二）年六月二日に越前国坂井郡波寄村（現在の福井県福井市）で生まれた。明治八（一八七五）年、政治家を志し上京、『采風新聞』の記者として活動、西南戦争後は自民権運動に奔走した。彼の民権思想は国体思想と不可分であり、また彼の興亜思想もまた国体思想に支えられていたと推測される。熟美保子氏は「上海東洋学館と『興亜』意識の変化」で杉田は興亜論を、概要次のように説明している。

杉田は、東洋学館開校一年前に「興亜小言」、それを修正した「興亜策」を著していた。これらの中で、杉田は、欧米は自由を求める国といながらも実際にはアジアの自由を奪っているとは非難し、「自由の破壊者」と批判している。また、アジアの現状について、それがバラバラであり、互いに助け合うという事がなく、欧米人に侵略されつつある状況を嘆いている。そして、日本と清国の關係について「唇齒相依輔車相接スル」と記述していた。



杉田定一

こうした主張を展開した杉田は、三国滝谷寺の道雅上人とともに、崎門学派の吉田東篁に師事していたのである。近藤啓吾先生の『浅見綱齋の研究』は、以下のような杉田の回顧談を引いている。

「道雅上人からは尊王攘夷の思想を学び、東篁先生からは忠君愛国の大義を学んだ。この二者の教訓は自分の一生を支配するものとなった。後年板垣伯と共に大いに民権の拡張

を謀ったのも、皇権を尊ぶと共に民権を重んずる、明治大帝の五事の御誓文に基づいて、自由民権論を高唱したのである」

そして、東洋学館設立には、九州改進黨とともに玄洋社が関与していた。明治十七年長崎において玄洋社の平岡浩太郎（十頁、浦辺登「東洋経綸の魁、平岡浩太郎」参照）と日下部正一が会談している。この場で、日下部は「上海は東洋第一の貿易港なれば、此地に支那語学校を起して、日本の青年子弟を教育し、支那の国情を窮めしめば、他日大陸経営の用に当つる事を得べし、又支那革命党員と交際の道も開くべければ是非とも右の学校設立を目論見たし」と述べている。さらに、東洋学館設立には、『大東合邦論』を執筆していた樽井藤吉も関与していた。東アジア諸国の対等合邦という構想が、ある程度東洋学館の構想にも反映されていたと見ることもできる。

趣旨書で注目すべきは、「東洋ノ衰運ヲ挽回セントスルナリ」という危機意識に基づいて、清国に対して「輔車相倚リ唇齒相保ツ」という立場を鮮明にしている点に注目したい。まさに、ここには杉田や樽井の思想が反映されている。さらに『東洋学館仮規約』「緒言」にも、「東洋諸国親和シテ以テ輔車相依リ唇齒相保ツノ大ヲ失フ可カラズ」と謳われていた。

（解説 坪内）

東洋学館趣旨書

孤島千年ノ鎖鑰破レテ欧米ノ風潮堤ヲ決シテ入り於此乎世態人情一変シ去リ所謂節義廉恥ナル者殆ント地ヲ拂ヒ唯新奇浮華ノ境ニ馳セ或ハ党派ヲ結ヒ以テ政党ト称スルアリ甲乙紛云政論ノ為メニ将サニ国ヲ傾ケテ已マントスルノ状アリ是豈ニ邦國ノ面目ナラムヤ惟ミルニ国家盛衰ノ岐ル、所以ノ者ハ外交政略ノ如何ニ因ラスンハアラス我國ニシテ永ク独立ノ体面ヲ完フセント欲セハ東洋政策ノ得否ニ注思セサル可ラス蓋シ東洋ノ神髓ハ清國ノ頭上ニ在テ存スル者ニシテ我國トノ関係ヲ論セハ即チ輔車相倚リ唇齒相保ツノ大要アル也苟モ志士ヲ以テ任スル者茲ニ主眼ヲ置カスシテ可ナラムヤ

我輩ハ怪ムニ不堪方今外交ノ要ヲ論シ且ツ海外ニ留学スル者欧米天地ヲ指スモ近接不可離ノ清國ニ至テハ寥トシテ聞ヘルナシ是レ洵ニ一大欠典ナラスヤ我輩ハ先ツ清國ノ政治人情風俗言語等ニ通曉シ所謂神髓手足ヲ活動スルノ妙ヲ知ルヲ必要ナリト信シ茲ニ一大学校ヲ設ケ大成有為ノ人士ヲ養成シ遂ニ将サニ長江一浮千里進テ東洋ノ衰運ヲ挽回セントスルナリ之ヲ記ス清國上海ハ即チ東洋ノ咽喉ニシテ金穀ノ輻マル所人材ノ來ル所我國ヲ隔ツル遠キニ非ス一棹至リ易キ地ナルヲ以テ此ニ校舎ヲ置ク江湖同感ノ士來レ學ヘ是レハ此レ眞正ニ報告ノ本

明治十七年七月 清國上海 東洋学館

連載 大亜細亞医学の中の日本②

坪内隆彦

前回、欽明天皇時代に百濟から医博士の王有陵陀（おううりょうだ）と採薬師の潘量豊丁有陀（はんりょうぶちょうだ）が来日したことの意味を説明した。

欽明天皇の後の敏達天皇（五七二～五八五年）時代にも、仏教思想あるいは朝鮮半島からの影響は続く。敏達天皇ご自身は廢仏派寄りの立場をおとりになつていたとされているが、この時代、病に冒された蘇我馬子が勅許を得て仏陀に祈祷したことを契機として、病の治療には仏陀の力が必要だという信念が国民に広がった。

用明天皇（五八五～五八七年）は、崇仏派寄りとされ、絶えず仏陀に祈祷されたため、仏陀の加護があれば疾病は治癒するという信念がさらに国民に深まつていった。

そして、推古天皇（五九三～六二八年）の時代、厩戸皇子（聖徳太子）が「薬草は民を養う要物なり。厚く之を畜うべし」と、勅命をもって薬草の採取貯蔵を奨励するに至る。厩戸皇子はまた、推古天皇元（五九三）年、四天王寺を建立の際、四箇院の一つとして施薬院を建てたとされている。

推古天皇は、六一一年五月五日、菟田野（現在の奈良県宇陀市大宇陀迫間や中庄周辺の「阿騎野」）で、薬猟りを開始される。『日本書紀』には「夏五月の五日に、菟田野に薬猟

す。鷄明時を取りて、藤原池の上に集ふ。会明を以て乃ち往く」とある。当初、薬狩りでは薬効の鹿の角をとっていたが、やがて薬草の採取となつていたと考えられている。

高句麗では三月三日に棠浪の丘で鹿・猪を狩る行事があつた。また、古代中国の長江中流域では五月五日に雑薬を摘む民間行事があつた。推古天皇の薬狩りには、高句麗と中国双方の影響が窺える。推古天皇の薬狩りは、冠位十二階に基づき冠をつけ、冠と同色の服を着用し、冠には飾りを用いた。このような服飾は、高句麗と類似している。

推古天皇の薬狩りには、朝鮮半島から流入した医学知識が影響を与えていたと考えることができる。推古十（六〇二）年十月には、百濟の僧観勒が来朝していたのである。日本における初代僧正となつた人物だ。六世紀末から七世紀初頭にかけて創建された飛鳥寺に隣接する飛鳥池遺跡から「観勒」と書かれた木簡が出土している。

観勒によつて、わが国には天文、曆本、陰陽道などが伝えられた。朝廷は、書生三十四名を選び、それぞれ分担して観勒の学問を吸収させた。曆法は陽胡玉陳、天文遁甲は大夫高聡、そして方術（医術）は山背日立（日並立、やましろのひたて）に学ばせていた。

推古天皇時代のわが国の医術は、朝鮮半島からもたらされた医学知識から強い影響を受けていたのである。

アルテミオ・リカルテ 生誕一五〇年記念祭開催報告

去る平成二十八年十月二十九日、アルテミ

オ・リカルテの生誕百五十年記念祭が、横浜山下公園内にあるリカルテ記念碑の前で催行された。リカルテは、フィリピン独立の英雄にして日比友好の絆である。彼は、フィリピン独立革命の指導者として、宗主国のスペイン、そしてアメリカと戦い、米比戦争で敗北して以降は、我が国に亡命した。そして大東亜戦争の勃発に際して、フィリピンに帰還し、山下奉文大將率いる我が軍と共に戦ったのである。結局リカルテは山中で病を発して亡くなったが、戦後フィリピンはアメリカの影響下に於かれながらも独立を果たした。



アルテミオ・リカルテ将軍

こうしたリカルテと我が国の深い因縁から、彼の功績は、日比友好の歴史遺産となっている。(リカルテの生涯に関する詳細は、坪内隆彦著『アジア英雄伝』にある「アルテ

ミオ・リカルテ」の伝記並びに筆者による別稿「アルテミオ・リカルテと日比の絆」を参照のこと)

折しも記念祭に先立つ二十五日から二十七日までの日程でフィリピンのドゥテルテ大統領が来日、メディアの注目を集めた。

ドゥテルテ氏は、国内での麻薬取り締まりで強権を発動する一方で、外交面でも対米自立を推し進め、我が国より先に訪問した中国ではインフラなどの経済支援を求めた。しかしそれはフィリピンが自国の安全保障をアメリカから中国に鞍替えするというのではなく、むしろ米中両国を牽制し、互いに競合せ、漁夫の利を得ようという強かな戦略の現れに他ならない。そうしたなかでの訪日であったが、果たして安倍首相はドゥテルテ氏に何を言ったか。よもやアメリカとの同盟の重要性を説いて、ドゥテルテ氏を諫めたというようなことはあるまい。ドゥテルテ氏は、都内での講演で、「おそらく二年以内に外国の軍隊はフィリピンからいなくなる」と述べ、米比軍事同盟の解消を示唆する一方で、安倍首相との会談では、南シナ海におけるシナとの領有権問題については「日本の側に立つ」と述べた。これらの発言が意味するのは、詰まるところ、フィリピンはアメリカでも中国でもなく、独立した日本との対等な同盟を求めているのであり、諫めるべきは対米自立を図るドゥテルテ氏ではなく、むしろ旧来

の対米従属に固執する安倍首相の方だということである。

また本稿執筆現在、アメリカ大統領選でドナルド・トランプが当選したとの報道がなされているが、今後世界は従来の多極化傾向に一層の拍車がかかると予測される。そうしたなかで、それぞれの国家には自主独立の主体性が強く要請され、我が国もまた従来の対米追従外交の変更が求められるであろう。

さて、秋晴れの週末、家族や恋人が憩う山下公園で行われた記念祭では、十人ほどの参集を得、まず最初に、先日ご逝去された三笠宮殿下のご冥福をお祈りし、黙祷を捧げた後日比両国の国歌を斉唱した。次に、主催者である弊会代表の折本が挨拶し、リカルテの経歴を簡単に説明した上で、我が国政府はリカルテの功績を日比友好の基盤とし、彼の功績を歴史的財産として外交的に活用すべきであること、そして新任のドゥテルテ大統領を我が国のメディアでは「暴言大統領」や「フィリピンのトランプ」などと云って誹謗する向きもあるが、フィリピンが歴史上欧米から受けた五百年に亘る植民地支配の苦しみが分らずして、ドゥテルテを語る資格はなく、むしろ我が国こそ、アメリカに対する自主独立の気概を示したフィリピンに学ぶべきであると述べた。次に来賓を代表して、アジア史研究家の原嘉陽氏と展転社社長の藤本隆之氏から

ご挨拶を頂戴した。次に、参列者が順番にリカルテの記念碑に献花し、最後に弊会副代表の小野が参会への謝辞を述べて記念祭は締めくくられた。

その後、会場を横浜関内駅近くのルノアールに移動して弊会顧問の坪内による「リカルテからドゥテルテへ」と題する記念講演があり、参加者共々活発な議論が行われた。講演の終了後、中華街の料理店で催された直会では夜が更けるまで盛大な酒宴が張られた。またその際、本日ご参会頂いた原嘉陽氏による弊会顧問就任が提案され、ご本人より承諾を頂いた。以上、記念祭の開催報告とする。



リカルテ記念祭の様子